
魔神のリングと憑依魔法

左リュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔神のリングと憑依魔法

【Nコード】

N3784V

【作者名】

左リユウ

【あらすじ】

つきなしがくえん
月無学園。

ここは科学的に「魔法」を「開発」してしまった事で有名な学園。主人公、神使浩介かみしこうすけはある事件がきっかけでこの月無学園に開校初の転校生として月無学園に転入する事となる。こうして、神使の魔法学園ライフが始まる事となった。魔神の力も持つ主人公の、魔法学園バトル！／新章、『一年生タッグ魔法対決大会』開始しました。一年生タッグのトーナメント戦。しかし、その試合の会場に突如魔神が襲来する。突如現れる魔神。突如現れた『セカンド・シリーズ』

と名乗る謎の少女。その少女を助け出す為に決意する風原。それぞ
れの思いが交錯する中、神のしもべ、『龍』が出現する。現在諸
事情により第一章凍結中。あらすじと第一章のまとめを更新しまし
た。またいずれ第一章は更新します。勝手をして申し訳ありません
m (((m

あらすじ / 登場人物紹介

・第一章 あらすじ

月無学園。魔法を科学的に開発する事に成功した学園であり、世界で初の『魔法学校』として名をはせている学校だ。最新の科学技術の結晶であり、魔法を使用するために必要な『リング』を用い、生徒は日々魔法を使用する。

そしてある日、月無学園に『魔神のリング』を持った少年が転入してくる。

その少年の名は神使浩助。かみしこうすけ

神使は、魔神のリングを託してくれた少年の仕守紅、クラス委員長の坂田翔太、小学校から密かに想いを寄せていた光琴音、神使に対してライバル意識を持つ倉井直人、気さくな風原啓十らと共に、クラス対抗で行われる魔法を用いた戦争、『クラス対抗魔法戦争』へと挑む。

学年で十番以内の実力を持つ生徒達を相手に、神使はなんとか魔神のリング、そして強力な魔神の力を憑依する事の出来る憑依魔法を駆使し、なんとか勝利を重ねる神使達。

しかし、戦争途中で魔神の妨害にあうが、これもなんとか憑依魔法を使い。退ける事に成功する。

こうして、最強のクラスと謡われる一年一組との戦いに挑む神使達一年四組だが、そこには一年最強の実力を持つとされる王我龍鬼

と呼ばれる少年が居た。

そして最後の戦争たいけつに挑む浩助達一年四組の面々。

しかし、その結果は王我一人の魔法チカラにより、一年四組の面々は一気に掃される。

なんとか生き延びた浩助は赤の憑依魔法を使いなんとか応戦するも、その圧倒的な王我の魔法により、敗北する事となる。

・設定等

リング使用時、「起動」と呼びかける事により、結界が発生。リングを持たない者は結界の中に存在できない。

結界の中でのみ、魔法が使用出来る。（また、通常は一人一つのリングしか使用する事の出来ない。所持するだけなら無制限）

月無学園には、学力順位他にも、『魔力順位』も存在し、これは定期的に学力テストと同時に測定が行われ、順位が決定付けられる。

順位はテストと共に決定するので、変動する事もある。

魔法、そして魔法を使う人間にはランクが存在する。

最上のSからA、B、C、D、E、Fまでの七段階存在する。

・登場人物紹介

神使浩介かみしこうすけ ランク？

所持指輪×六しよじりんぐ

- ・赤魔法（？J） ランク？
- ・赤魔法（？Q） ランク？
- ・緑魔法（？J） ランク？
- ・緑魔法（？Q） ランク？
- ・黄魔法（？Q） ランク？
- ・青魔法（？Q） ランク？

『J』は右腕に宿り、『格闘戦』を得意とする。

『Q』は左腕に宿り、『魔法の放出』を得意とする。

所属クラス一年四組。

主人公。ある事件により、ある日突然月無学園に転入する事となる。魔神のリングを仕守紅から託された。

同じ種類のリング（例えば『J』の赤魔法、『Q』の赤魔法）を同時に使用する事で魔神の力を一時的に憑依させる事が出来る憑依魔法が発動。

一定時間爆発的な魔力を得、圧倒的な力を発揮する。

神使は魔力コントロールの鍛錬に成功し、持続時間数十秒だった憑依魔法の発動時間を五分へと拡大する事に成功した。

坂田翔太さかたしやうた ランクC

所持指輪×一

・部分強化魔法 ランクC

一年四組の委員長。

クラスのリーダー的存在。

神使と仲が良く(?)、また、『クラス対抗魔法戦争』では作戦を考えたりと、委員長らしくクラスを纏めた。

つい最近知り合ったという心愛花こころめいがの事を意識している………？

光琴音ひかりことね ランクA

所持指輪×二

・治癒精霊召喚魔法 ランクB

・全てを破壊する暗黒龍 ランクA

一年四組所属。

学年順位第四位の实力を持つ。治癒魔法だけで無く、驚異的な破壊力を持つ『全てを破壊する暗黒龍』のリングを持つ。

優しく、真面目な性格。

小学校の頃から密かに神使に想いをよせているのだが、当の神使本人は気づいていない。

仕守紅しもりくれない ランク？

所持指輪しよじりんぐ × 二

・円卓の盾 ランクC

・不明

神使に魔神のリングを託した張本人。防御魔法、『円卓の盾』を使用する。実践的な技術に関しては学年の上位十人に匹敵する。謎の多い少年。

因みに、前回の魔力測定はサボっていた為にランクは測れず。

倉井直人くらいなおと ランクB

所持指輪しよじりんぐ × 一

・多種式射撃魔法 ランクB

一年四組所属。

学年順位第十位の实力を持つ。

光に想いを寄せているが、同時に神使にはライバル心を持っている。

自身が操る魔法、『多種式射撃魔法』は学年で二番目の応用力を持つ。その幅広い応用力により、様々なタイプの魔法弾を放つ。

また、本当の實力を隠しているらしい……？

風原啓十かせはらけいと ランクC

所持指輪×一

・風を呼び込む精霊の靴 ランクC

一年四組所属。

全魔法中のトップクラスの機動力を持つ『風を呼び込む精霊の靴』を駆使する。

陽気な性格で、『クラス対抗魔法戦争』ではその機動力を生かし、活躍した。

心愛花 ランク？

所持指輪不明

一年四組所属。

坂田に想いをよせる少女。

クラス対抗魔法戦争時は体調不良の為、学園を欠席しており不参加。

水面鏡花 ランクS

所持指輪×一

・水操作魔法 ランクS

一年三組所属。

学年順位第二位。

さらさらとしてロングヘアが特徴の少女。活発な性格で、また、学年で最も魔法の応用に長けている。

そして自身の魔法の応用技、『ウォーター・バレット水弾丸』を得意とする。

ときどめしん時止進 ランクS

しよじしんぐ所持指輪×一

・タイム・ストッパー時間停止魔法 ランクS

学年順位第九位。

水面鏡花とは幼馴染み。また、自身の魔法、『タイム・ストッパー時間停止魔法』は学園初の時間操作系の魔法で、そのレアリティゆえにランクSとされた。

また、時止自身も、初の時間操作系魔法を使用する者として、そのレアリティゆえにランクSと、学年第九位という称号が与えられた。

時止自身は、自分はランクF程度の実力だと思っている。

おつがりゆし王我龍鬼 ランクS

しよじしんぐ所持指輪×一

・クワン血龍 ランクS

月無学年一年最強の少年。圧倒的なその魔力素養センスにより月無学園

にスカウトされ、入学と同時に一年最強の称号を得た。

クラス対抗魔法戦争ではその圧倒的な魔法チカラにより、神使達一年四組を一掃。神使の赤の憑依魔法でさえも圧倒した。

現在諸事情により第一章凍結中

X	X	X	X	X	X	X	X	X	現在、諸事情により第一章凍結中
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X

現在諸事情により第一章凍結中

現在、諸事情により第一章凍結中
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X

現在諸事情により第一章凍結中

現在、諸事情により第一章凍結中

X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X

現在諸事情により第一章凍結中

現在、諸事情により第一章凍結中

X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X

現在諸事情により第一章凍結中

現在、諸事情により第一章凍結中

```

X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X
X X X X X X X X

```


現在諸事情により第一章凍結中

現在、諸事情により第一章凍結中
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X

現在諸事情により第一章凍結中

現在、諸事情により第一章凍結中

X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X

現在諸事情により第一章凍結中

現在、諸事情により第一章凍結中

X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X
X X X X X X X X X

現在諸事情により第一章凍結中

X	X	X	X	X	X	X	X	X	現在、諸事情により第一章凍結中
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X
X	X	X	X	X	X	X	X	X	X

第一話 追う者、追われる者

生徒会。

月無学園において、生徒会とは巨大な意味を持つ。

それは、学園の治安維持。

魔法学校という顔を持つ月無学園は、力を手にした生徒が暴走する事も考えられる。

そんな生徒の暴走から、一般の生徒を守り、学園の平和を守るのが、生徒会の役目なのだ。

そして、その生徒会は今日も、学園の為に戦い続ける。

「見つけたぞ」

ある少年は、ある少年を追い詰めていた。

商店街のど真ん中。

しかし周りには、誰も人は居ない。

結界。

その中に二人の少年は居た。

よって、一般人である者が存在できるはずもなく、また、結界の中に居る者達を認識出来るわけでもなかった。

擬似的な、閉鎖空間。

追い詰められれば、もう逃げる手段は無い。

「許してくれ．．．．頼む．．．．」

追い詰められた少年。

必死に、追っ手に向かって、懇願する。

「はあ？ おいおいおい。そりゃあねえだろ。俺にこんなつまらねえ鬼ごっこさせておいてよ？」

「．．．．ッ！！」

鬼ごっこ、と目の前の少年は言った。

しかし、それは始まってみれば一方的な虐殺のようなもので、追われる側の少年としては、それが鬼ごっこことよべるような物ではなかった。

ざざっ、と追う側の少年の耳につけてある小型通信機。

そこに、通信が入る。

「あ？ ああ、ハイハイ。今から連れて行きゃあいいんだろ。ただし、」

にやり、と追う側の少年は、笑う。

ぞっ、と追われる側の少年の背筋が一瞬にして凍りついた。

「少しだけ、遊ばせてもらっせ？」

ボンッ！！ と追う側の少年の背中から、紅い翼が出現した。

追う側の少年、一年最強の男にして生徒会所属の、王我龍鬼。

彼の『遊び』の時間が始まった。

「やりすぎ、だよ」

「いいだろ別に。割にあわねえんだよ。ああでもしなきゃよ」

生徒会室。

王我はその後、『学校の治安を乱す生徒』を肅清した後、生徒会長に呼び出された。

「それでも、だよ。一応、相手もこの学校の生徒なのだから」

「はっ。そうかよ。俺にとってはゴミにしか見えねえな」

さっきまで王我が追っていた生徒も同じ一年なのだが、同級生最強から見れば、確かに物足りない相手だろう。

「そもそも、俺は入りたくてこんなトコに入ったんじゃない」

「仕方が無いじゃないか。約束なんだから」

「………チツ」

この話題になると、少し王我は不利だ。

王我が月無学園に入学した直後、王我は生徒会へとムリヤリ入れさせられた。

それというのも、王我はこの生徒会長、夕羽神姫ゆはのかみとの魔法対決に敗北し、生徒会に入れさせられたのだ。

「だから仕事はしっかりこなしてもらわないとね」

「そうよお〜」

ぼふっ、と王我の顔に何かやわらかい物が当たった。

詳しく言うと、女子生徒の胸、だ。

一人の女子生徒が、王我の頭を胸で抱きしめていた。

「あああああああああああああああああああああああああ
ああッ!?」

バツ、と一気に振り払う。

「テメエッ!! 毎度毎度うぜえんだよッ!!」

「ああん。いじわるう」

「クッソがつ! テメエはそれでも副会長かつ!!」

この副会長と呼ばれた女子生徒は、白川洋子。^{「いじわるなつ」}

王我と、夕羽が苦手とする数少ない相手だ。

「残念ながら、その通りです」

夕羽はしみじみと、言う。

本当に残念がっているようだ。

「つつーか。もう用がねーのなら、俺は帰る」

「あつ。待ってよ王我くゝん」

白川の静止を振り切り、王我は生徒会室を後にした。

生徒会室に残ったのは、夕羽と白川の二人。

生徒会は現在、王我を含めた三人だけだ。

「いっちゃったわねえ」

クスクスと楽しそうに白川は笑う。

「君がからかうからだろ」

「あら。いいじゃない。別に」

よくないんだよ．．．．．と夕羽は小さく呟く。

ついでに、額に手を当てながら。

「コレが、今回の仕事内容の資料？」

すっ、と白川が生徒会長のデスクから、資料を手取る。

そこには、ある一人の少女の顔写真が写っていた。

「今回の仕事はいろんな意味でかなり、やつかいだ」

「うん。まあ、確かにねえ」

「でも、だからこそ、王我君にやってもらいたかったんだけど」

そしてジトツ、と白川を見る。

「どっかの誰かさんが余計な事をしたから」

「あ、あはは。あははははは」

「笑えば許してもらえと思わないでね？」

「．．．．．探してくるわ」

「当然だよ」

そして白川は生徒会室を後にした。

第二話 整えられた舞台

「チッ」

王我は、生徒会室を後にした後、そのまま学校を出た。今は平日で、勿論授業もあったのだが、そのままサボったのだ。生徒会業務中は授業が免除されるのだが、今は勿論、生徒会業務中ではないが、王我には関係なかったのだ。

「めんどくせえ……………」

王我はふらふらと町を歩く。

目的も無く。

王我には、目的など無かった。

月無学園に来たのも。

巨大な力を持つリングを使用する事にも。

相手を叩き潰す事にも。

そして、自分の存在する意味も、目的も、知らなければ解らない。

元々月無学園に来たのも、魔力素養マジツウがあつた為、スカウトされたからだ。

王我は目的が無かった。

ゆえに、スカウトを断る道理もなかった。

親が居ない王我にとって、莫大な援助を受けられる月無学園の方が、預けられた施設に居るようりはマシだろうと思っただけだった。

()とりあえず、適当にコンビニに行つて、何か買って帰るか)

そして王我はコンビニに立ち寄る。

雑誌、ジュース、食料。

それらを乱雑に買い物カゴへとぶち込む。

魔力素養まじゆうによるスカウト。

それに伴う莫大な援助。

よつて、金銭的に困る事は何も無い。

大量に好きな物を買つて、そのままコンビニを出る。

ふらふらと目的も無く、歩く。

「すみません」

歩いていると、背後から声が聞こえた。

「なんだ」

とりあえず、声が聞こえた方向に振り向く。

そこに居たのは、制服に身を包んだ一人の少女だった。

この辺りでは月無学園の制服を着た生徒が多いのだが、今は授業中。

居るわけが無い。

そして当たり前だが、目の前の少女の着ている制服は、月無学園の物ではなかった。

そもそも『制服に身を包んだ学生がこの時間帯に居る事自体がおかしい』。

王我の場合はある種の特別措置のような物だ。

「あのう。月無学園って、何処に行けば良いのでしょうか？」

「月無学園？」

目の前の少女は月無学園の生徒では無い。

そもそも、この辺りの高校の生徒なのかも解らない。

そんな少女がなぜ、月無学園に用があるのか。

王我はしばらく考えるが、解らない。

そもそも、考えるための材料が少なすぎるのだ。

「はいっ」

目の前の少女はにこっ、と笑う。

「知るか」

とは言っても、今は月無学園の制服を着ている（着くずしている）ので、そんな事を言ってもごまかせないだろう。

まだ聞いて来るのかと思いきや、

「そうですね。ありがとうございます」

ペコリ、とお辞儀をしてその少女はそのままトコトコと歩いていってしまっただ。

月無学園とは間逆の方向に。

「なにいつ!??」

流石の王我も、啞然とするしかない。

王我は今月無学園の制服を着ている。

自分が月無学園の生徒だと言ってるのと、同じ事なのだ。

それなのに。

あの少女は、王我の嘘を鵜呑みにしたのだ。

(なんてバカなんだ、あの女はっ・・・!!?)

王我の意識をひきつけた少女。
しかし。

それだけだ。

王我にとって、それだけだった。

そして王我はその場を後にする。

その背後では別れた少女が電柱に頭をぶつけながらふらふらと危なっかしい足取りで月無学園と間逆の方向を歩いていった。

「見つけました」

王我と少女が別れた後。

少女を見据える、瞳。

その瞳の主が、影から少女を『監視』していた。
性別は男。

この男もまた、制服に身を包んでいる。

見かけも王我と変わらない年代学生だ。
手には携帯。

通話状態にして、耳にあてている。

誰かと通話しているのだ。

因みに、その携帯は通常の物とは違い、盗聴対策も施されている『カスタム仕様』だ。
つまり、その携帯の持ち主と、その通話相手は、『盗聴されては困る会話をしている』という事になる。

「様子は？」

「正直、手間取る事もないと思います」

「油断は禁物だぜえ？ 特に、こういう大事な仕事の時には、な
．．．．．すみません」

「で、ターゲットは第三者と接触したのか？」

「はい．．．．．そして、その相手なのですが
どうした」

そして少女を監視していた男は一言間をあげ、

「王我龍鬼です」

「ほう」

男は、電話の先にいるであろう自分の『上司』がうつすらと微笑んでいるのを感じ取った。

「どうします？」

「かまわねえ。ターゲット確保にあたれ。こつちも今から『仕事』
だ」

「魔法の使用は？」

「許可する」

「解りました」

プツッ、と通話が切れる。

男は制服のポケットに携帯をしまつと、すつ、と少女に視線を集中させる。

その男は、今からたった一人の少女に、牙を向ける。

光は放課後、月無学園の校門前に居た。

現在教室で掃除当番であるために掃除を行っている神使を待っているのだ。

クラス対抗魔法戦争後、光の友人であり坂田の彼女（？）の愛花がまた学校に登校するようになってから、坂田は毎日愛花と帰っている。

風原は風原で部活動に入っている為、放課後は部活動に勤しんでいる。

紅は紅でふらっ、とまた図書館に行つてしまった。

倉井は、現在神使と仲良く（？）掃除を行っている。

しかし倉井は塾があるらしく、帰りは急がなければならない。

よつて、今日は光と神使だけで、帰る事になる。

（か、神使君と二人きり．．．．．うつつ。ドキドキします．．．．．）

この状態でかれこれ二十分ほど突っ立っている光なのだが、それでもドキドキは収まらない。

（何か、話題があつた方がいいですね．．．．．話題話題話題．．．．．）

その時。

ピリリリリリリリリッ、と光の携帯から着信音が響く。

「はっつ」

その着信音で我に帰った光はあわてて携帯を手に取る。

愛花からのメールだった。

受信ボックスからメールを開く。

「えつと、坂田君が学校に忘れ物したので、持ってきてあげて？
ど、ど、どという事なのでしょう？」

きよとんとする光。

この時。

光は気付かなかった。

背後から、ある男子生徒が近づいている事を。

「ど、ど、どという事、ねえ。そりゃこ、こ、こという事だ」

「えっ」

瞬間、光は意識を失った。

背後から光に近づいた男子生徒が、手刀で光の首筋に一撃与えたためだ。

「おつと」

ストン、と倒れる光を支える男子生徒。

「さあて、お仕事開始だ」

ニヤリと笑ったその男子生徒が身を包んでいた制服は、月無学園の物ではなかった。

こうして、舞台は整えられた。

少年達の戦いが今、始まろうとしていた。

第三話 イレギュラー

王我龍鬼は少女と別れた後、真っ直ぐに自宅に向かっていた。別にする事など何も無い。

目的の無い王我にとって、寄り道する所など、どこにもない。しかし。

ピクツ、と王我の足が、止まる。

「これは……………」

王我は後ろを振り返る。

別に少女が気になったわけではない。

魔力を、感じ取ったのだ。

そして、王我が見据える先。

そこに在ったのは、結界。

「学園の外で結界だと？」

現在は授業が終わり、放課後になった頃だ。

しかしまだ大半の学生は月無学園の外には出ていないだろう。

時間帯的にはまだHRを行っている時間のハズだ。

そして、その時間帯であるにもかかわらず、結界が作動している。

（また生徒会がらみか？ ……いや、違うな）

王我は自分の出した考えを否定する。

もしも生徒会がらみの『仕事』に関係する事であるならば、すぐ

さま連絡が入る。

結果が展開されているにもかかわらず連絡が入っていないのはおかしい。

しかし、王我は自分の出した考えを否定しきれないでいた。なぜなら。生徒会の『仕事』がらみである事以外、説明がつかない。

もしくは。

生徒会にとって、『イレギュラー』な事態であるか。

「面白そうじゃねーか」

ニヤリ、と王我は笑う。

良い暇つぶしが出来た、ぐらいにしか思っていない。そして王我は歩を進める。

王我と別れたあの少女も、結果が展開されている方角に居た事を、王我は少しだけ、思い返していた。

生徒会室。

夕羽は王我が気付くよりもいち早く、結果が展開された事について、感じていた。

そして、もう一つの『イレギュラー』にも。

「もう、動いてきたか……」

チラリ、と手元の資料に目を通す。

そこには、ある一人の少女の写真と、名前等が書かれていた。

その写真の少女は、王我と接触した、バカ正直な少女。

名前は、『仕守桜』と書かれていた。

「頼んだよ。王我君。そして……」

ポツリ、と、夕羽は一人、呟くのだった。

桜の目の前に、ある一人の男子生徒が現れていた。

すつ、と一歩、桜に近づく。

それと同時に、桜は後ずさる。

桜はこの男子生徒を知らない。

しかし、『感覚的に危険な人物だと、判断した』。

「誰、ですか……あなたは」

「アンタには悪いが、大人しく捕まってもらおう」

男子生徒が出したのは、一つのリング。

そして、そこから現れたのは、『雷』。

バチッ、バチバチッ、と雷が唸る。

右手に集約された、雷。

出力的には、相手を気絶させる物なのだが、桜にはそれが解らなかつた。

単なる、恐怖の対象でしかなかった。

「リングを持っていないのなら、保護機能は作動しないだろう。残念だったな」

「あっ……………」

そして、右手に集約された雷が、桜へと放たれた。

桜は目を瞑る。

痛さを覚悟した。

苦しみを覚悟した。

恐怖で自分の心が満たされるのを覚悟した。

しかし。

『何も、無かった』。

「……………」

桜は目を開ける。

真っ先に飛び込んできたのは、太陽の光。

そして、自分の目の前に、

血のように紅く輝く翼があった。

その翼が、桜を雷から守っていた。

「何ッ!？」

「なんだか面白そうな事やってんじゃねーか」

「キサマはッ．．．．．!!」

瞬間、ゴバツ!! とその翼は振るわれた。

雷の魔法を使う男子生徒は、一気に『血龍』の紅い魔力により、吹き飛ばされた。

ガゴゴゴゴゴゴッ!! と近くの家へと激突する。

桜には、『傷一つ無い』。

「あな、たは．．．．．」

「．．．．．」

疑問を投げかける桜。

しかし、王我は何も答えない。

王我は正直、桜が雷に当てられてからあの男子生徒を吹き飛ばしてもよかった。

しかし、体が勝手に動いてしまった。

結果、桜を守る形になってしまったのだ。

桜を助けた理由。

それが、今の王我には解らなかった。

その時、王我の制服のポケットから携帯がなった。

「なんだ」

「ひゅ〜、なんとか間に合ったみたいねえ」

「はあ？」

「アナタが今『守った』女の子、あつ、桜ちゃん、って言うんだけどね？ 生徒会のクライアントから保護を依頼された保護対象おんなのこなの

よ。いやあ〜良かった良かった。あなたが近くに居てくれて」

「用がねえのなら切るぞ」

「あっ、待って」

「あ？」

「頑張ってねん」

プツッ。

王我はすぐさま通話を切った。

「ったく。アイツの茶番に付き合ってられるか」

しかし。

今の会話で、王我には理由をムリヤリ作る事が出来た。
桜を助けた理由を。

「あの……………」

「なんだ」

「アナタは、なぜ、私を？」

そして王我は桜に背を向けながら、言う。

「仕事だ」

王我は今まで、目的も無く生きていた。

目的も無く、魔法ちからを振るってきた。

しかし。

今は違う。

今は、この瞬間は、この少女の為に魔法ちからを振るおうとしていた。

王我は初めて、目的のある戦いを行おうとしていた。

たった一人の少女を救う為に。

第四話 ブラッド・レイン

「おい」

「なんだよ」

「光さんが居ないじゃないか」

神使と倉井は、現在は校門前に居た。

元々、倉井も途中まで光と下校する予定であったため、神使と共に光が待っているハズの校門前へとやってきたのだが。

その光が、居なかった。

「あれ？ 待つてるっていつてただけだな。やっぱ、俺達の掃除が遅かったから帰っちまったのか？」

神使と倉井は先ほどまで掃除当番であったため、掃除を行っていたのだが、光を待たせるわけにはいかないので、二人はすぐさま掃除を終わらせたのだ。

ゆえに、時間はそれほど経ってはいない。

神使はきよるきよると光が居ないか辺りを見渡す。

勿論、光は見つからなかった。

しかし。

代わりに見つけた物が、あった。

「？ これは・・・」

近くに落ちていたのは、ピンク色の携帯。

神使はこの携帯に見覚えがあった。

これは紛れも無く、光の物だ。

「それは光さんの携帯じゃないか。何故お前が持っている？」

「落ちてたんだよ」

「落ちていた？」

倉井は一気に不審な気配を感じ取る。

神使も、動揺にその気配に気付いていた。

「妙、だよな」

「……ああ」

通常、携帯を落した場合に落ちた際にある程度の音はするはずだ。よって、携帯を落とせば多くの場合は気付くだろう。

そもそも、携帯を地面に落とす、という場合がまず少ない。

光は普段はカバンに携帯を入れている。

これではまず落ちないだろう。

そしてあと考えられるのは、携帯を操作している時に落とした場合。

これならば、手がすべった、等の理由で落とすことは十分に考えられる。

しかし、通常、携帯を操作している途中で落とせば誰だって気付く。

この事から。

神使と倉井はある一つの考えにたどり着く。

もしも、『携帯を落としたと解っていても、拾えない状況に居たのならば？』もしくは、『落とした携帯を拾えない状況に陥ってかから落としたのならば？』

「倉井。コレって……」

「解っている。しかし、情報が少なすぎる」

二人は、今の状況からは「光は何者かの手によって姿を消した」と考えた。

最悪の事態を想定して動かなければならないからだ。

光の身に何かあったのか。

そもそも何かあったとして動くとしても、圧倒的に情報が少なすぎる。

動きたいのに、動けない。

倉井のその眼鏡の奥にある鋭い瞳は、確かに焦りの色を見せていた。

「とにかく、探そうぜ」

神使はとにかく、光を探そうと走ろうとした。

その時。

「待ちなさい」

凜、と声が響いた。

神使と倉井はその声の先に体を思わず向ける。

その先に居たのは、

「こんにちは。そして始めまして。私は二年一組所属、生徒会副会

長の白川洋子よ」

「せ、生徒会？」

「生徒会だと!？」

神使と倉井の反応は違う。

そして疑問系の神使に向かって倉井はじとつ、と神使を見ている。

「え、えつと、生徒会って？」

「お前、知らないのか」

「まだ転校してきたばっかだから仕方が無えだろッ！！」

「生徒会は転校初日に知っておくのが普通だッ！！」

うー、と互いをにらみ合う神使と倉井。

そして神使は倉井に尋ねる。

「で、生徒会って一体何やってるんだ？」

「主な業務は学校の治安維持だ。その幅は広いけどな。簡単に言えば、学園の警察だ」

「なるほど。学園警察、か。って、警察！？ やっぱ、これってそんなにやばいのか！？」

『学園警察』という肩書きを持つ者が出てこなければならぬ状況。

それほど、事態は深刻なのだ。

だから、倉井はさつき過剰な反応を見せたのだろう。

「そつ。単刀直入に言うわね。一年四組の光琴音さんは、何者かに誘拐されたわ」

「ッ！！」

最悪の事態が、起こってしまった。

神使と倉井の空気が凍りつく。

「そして犯人は現在光さんを誘拐したまま逃走中よ」

白川から告げられた新たな情報。

神使としてはもう、限界だった。

「くそっ！ だったらなおさら早く助けねえとッ！！」

「だから待ちなさいって。犯人の居場所は解ってるの？」

「うっ……けど、どうやって……」

そして白川はふうっ、とため息をつき、すっ、と制服のポケットから端末を取り出す。

これは生徒会専用の薄型携帯端末だ。

様々な機能が搭載されており、GPS機能、データ採取機能など、生徒会の活動に必要な機能が搭載されている。

そして今、白川の持つ端末に表示されているのはこの町のマップ。赤い点が一つ、月無学園からそう遠くない距離に表示されている。

「これに光さんの居場所が表示されてるわ。受け取りなさい」

ポンッ、と神使に端末を渡す。

「あ、ありがとうございます」

そして白川は神使の瞳をじっ、と見つめる。

「あのね、大事な人を守りたかったら、もう少し考えて行動するのよっ」

「……ッ、はい」

そして白川はにこっ、と笑う。

「んっ。解れば良いわ。行きなさい」

「ありがとうございますっ！ 倉井ッ！」

「ああ」

そのまま、神使と倉井は走り去っていった。

神使はその時、「なぜ俺達にこんな物を？」という疑問が頭をよぎったが、とりあえず走る事にした。

神使と倉井の後姿が見えなくなるまで、白川は見つめ続けていた。

ピリリリリリッ、と白川の携帯から着信音が響く。

白川はその通話に応じる。

相手は、夕羽だった。

「もしもし」

「光琴音さんの奪還は、君に頼んだはずなんだけど」

「あら。覗き？」

「人間きが悪いな。監視と言ってよ。それよりも、後輩に仕事の押し付けかい？」

「ん〜、まあそんなトコね。それに、見てみたかったし」

「見てみたかった？　．．．．．まさか」

「そう」

そして白川はフツ、と微笑み、

「『魔神の才』を、ね」

「ははははははははははははッ！．．．」

トンツ、トンツ、と身軽に光を抱えて、誘拐犯は飛ぶ。
そして器用に片手で携帯で通話を行っている。

「ようつ！ 『イブリース』！ そっちはどうだ!？」

「今吹き飛ばされた所ですよ。 『ラーヴァナ』」

「吹っ飛ばされた？ はっはっはっ!! そりゃ傑作だツ!!」

誘拐犯 『ラーヴァナ』は高らかに笑う。

そして通話相手の桜を襲撃した男、 『イブリース』はむすつ、とした様子で、

「大丈夫ですよ。今から、倒します」

「それでいい。お前のそういう負けず嫌いな所嫌いじゃないぜ？
つと」

「? どうかしましたか？」

「丁度、こっちも面白くなってきた所だ」

「.....追っ手、ですか」

「ああ。わざわざ結界を展開してたかいがあったぜ」

「とにかく、互いの目的を果たしたら、集合予定ポイントに集合で」
「おっ」

プツッ、と通話を切る。

瞬間。

ゴバツ!!.....!! と、

魔法弾が、ラーヴァナの持つ携帯を粉碎した。

「はッ。遠距離射撃か。やるじゃねえか」

ラーヴァナが見据える先。
そこに。

『多種式射撃魔法』を展開した、倉井が居た。

「当たったか？」

神使と倉井はGPSを頼りに光を追い、そしてついにラーヴァナを見つけた。

そしてラーヴァナが通話を行っているのを見つけ、多種式射撃魔法でまずは通信手段を破壊した、という事なのだ。

「当然だ。俺を誰だと思っている」

神使と倉井は現在、飛行しつつ、追跡を行っている。

先日のクラス対抗魔法戦争時に神使は魔神との戦闘により黄魔法のリング、『K』を手に入れた。

魔神のリングは『J』が右腕に宿る格闘タイプ。

『Q』は左腕に宿る放出タイプだ。

そして、三つ目の種類として『K』が存在する。

そのスタイルは『飛行』。

神使は現在、右腕に赤魔法を、そして左手は黄魔法のリング『K』を使用している。

そして背中に展開されているのは、『雷の翼』。

よって、現在神使は飛行を行っている。

対して、倉井は『多種式射撃魔法』のカスタムパーツの内の一種、『フライトユニット』を使用している。

『多種式射撃魔法』のカスタムパーツはあくまでも『支援パーツ』であって、その種類はライフルをカスタムするだけでなく、多種式

射撃魔法の『使用者』のサポートする役割も持ち合わせている。

『カスタム』と『サポート』。二つの強化パーツ。

そして現在、倉井が使用している強化パーツは後者。

『フライトユニット』はスケートボードのような物で、倉井はその上に乗ることで飛行を可能にしている。

それに加えて、現在ライフルにも精密射撃用の『カスタム』強化パーツも装備している。

二つの強化パーツの制御。

負担は避けられないが、今はそんな事を気にしている場合ではなかった。

「はッ！！ やるじゃねえか！」

「光さんは返してもらおうぞっ！！」

ガガガガガガガガガガガガガガガガッ！！ と倉井は『多種式射撃魔法』のライフルから魔法弾を連射する。

今放ったのは倉井が神使と初めて戦った時に使用した『光速の魔法弾』。

スピードを重視した魔法弾だ。

追尾の効果を持つ『曲速の魔法弾』は、相手は光を抱えて移動しているため、使用は避けた。

そしてラーヴァナはリングをはめている手から、光の粒子を放出する。

粒子によって構成されたのは、大剣。

紅い、大剣だった。

これが、ラーヴァナの魔法、『ブラッド・レイン』だ。

そして、ギャギャギャギャギャッ！！ とブラッド・レインで、片手だけで魔法弾を全て捌き切る。

「何ッ！？」

「なかなか完成度の高い魔法だが、ソイツは……………」

ボンツツ！！ とラーヴァナの足元が爆発し、そして『加速』する。

ラーヴァナが靴底に仕込んでいたのは、特別な加速装置。

魔力を供給する事により、魔力爆発が発生。

それにより、特殊な加速方法を実現した。

そして、加速した先に居るのは、倉井。

「接近されたら、意味ねえよなああああああああああああああああああああ
あああああああツツ！！」

「ツッ！！」

ボンツ、とブラッド・レインを倉井に振り下ろす。

倉井はとつさにライフルを盾にするが、それでも、ダメージは免れないだろう。

正直、少し油断していた。

いや、厳密に言えば、油断はしていなかったが、裏をかかれた、という方が正しいだろう。

倉井は、まさか『誘拐犯が、取り返す^{もくて}べき人を抱えたままコチラ
に向かってくる』とは思わなかったからだ。

ガッキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイツツツ
！！ とブラッド・レインが振り下ろされる。

しかし、ブラッド・レインの先に居たのは、『赤魔法でブラッド・
レインを防いだ神使だった』。

「ああ？」

「近接戦闘^{近接戦闘}の為に、俺が居るんだよツッ！！」

ガッ！！ と神使は赤魔法でブラッド・レインを弾く。
ラーヴァナは再び、靴底で魔力爆発を起こす。

神使の赤魔法に向けて。

「なっ!?!」

「はははッ!?!」

ラーヴァナと神使達の距離が開く。

そしてトンッ、とラーヴァナは近場のビルへと着地する。

「ははっ。楽しいなあ。が、まずは仕事の完遂が先、か」

ゴソゴソとラーヴァナはポケットから『あるコントロールパネル』を取り出す。

そして、起動させた。

「くっ。わりい。一撃で仕留められなかった」

「フン。大方、光さんが居るから手加減してたんだろっ」
「うっ」

「にしても、かなり手ごわいな」

「.....ああ」

ラーヴァナの実力は、今のやりとりで神使と倉井には十分すぎる程伝わった。

ハンデを負っている状態で今の状況だ。

そんなラーヴァナからどうやって光を取り返すのか。
考えをめぐらせる。
しかし。

「何か聞こえないか？」

「？ 何だよ」

キイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

「これは……機械音ツ!？」

瞬間、真下から、巨大な四本足のロボットのような物が現れた。
 AIMド・AIMス
 武装兵器。

文字通り、武装された兵器、だ。

しかしその実体は最新技術によって作られた、軍用兵器だ。

「なっ！ なんだよこれッ!？」

「くそっ！ ヤツめ、まさか武装兵器まで持ち出してくるとはッ!

！」

ガゴンッ、と AIMド・AIMス武装兵器はその四本の足を大きく広げる。

今から行くのは、捕縛。

神使と倉井を捕らえる気なのだろう。

「神使ッ!!!」

ドゴンッ!!! と倉井は神使に向けてライフルから魔法弾を放つ。

「がつ!?!？」

不意打ち。

よって、神使はその衝撃で吹き飛ぶ。

倉井の目的は、神使をこの捕縛から逃がす事だ。

「く、倉井ッ!?」

神使が見た時にはもう、倉井は武装兵器アームド・アームズによって捕らえられていた。

四本の足により構成された、魔力の牢獄。

その中に、倉井は捉えられていた。

「神使ッ！ お前は光さんを追えッ!!」

「ッ!! 倉井ッ!!」

「俺にかまうなッ！ すぐに追いつくッ！」

そのまま、倉井と武装兵器アームド・アームズは地上へと落下していった。

「くそッ！」

そのまま神使は、再び追跡を開始する。

今の襲撃の際に、ラーヴァナは既に逃走を開始していたからだ。

迷っている時間など、無かった。

第四話 ブラッド・レイン（後書き）

これからもこんな感じで科学兵器みたいなものも出てきます。
この作品の魔法も、科学兵器みたいな物ですが

第五話 雷操作魔法

ガラガラと、民家の残骸が崩れ落ちる。
その中に、イブリースは居た。
勿論、死んではない。

「なるほどな。．．．．早い」

バチツ、と手に紫電が巻き起こる。

そして一気に瓦礫をなぎ払う。

ボンツ！！ とイブリースを覆っていた瓦礫が砕かれ、中からイブリースが現れた。

「はっ。解ってはいたが、ダメージ無しかよ」
「当然だ」

ポンポンツと汚れを払う。

そして、雷が発生する。

「雷の属性、か」
「そうだ」

ババババババババババババツ！！ とイブリースの周囲に雷が展開される。

それを見た王我はすっ、と桜の前に立ちふさがる。

王我は戦闘態勢へと移行する。

イブリースから目を離さない。

相手の動きをよく観察し、そして相手の手を読む。

それが、『戦闘』。

勿論、それだけが『戦闘』ではないが、相手の動きを読む事は大切だ。

ゆえに、王我は相手から目をそらさない。

じつと、相手の動きを見る。

しかし。

イブリースが、消えた。

「なっ

」

瞬間、ゴツ、と左方向から痛みが走る。

王我は右の方向にフツ、と体が浮き、吹き飛ぶ。

気がつくと、イブリースが王我の左腕を裏拳で殴り飛ばしたのだ。

一瞬で。

ガゴンッ！！ と今度は王我が民家へと激突する。

瓦礫がガラガラと崩れ落ちる。

しかし。

ゴバツ！！！！！！ と瓦礫が巨大な魔力によって爆散する。

「この程度で、図にのってんじゃねえよ」

「やはり、な」

ボンッ！！ と王我は再び『血龍』を展開。

背中に、血のように紅い、龍の翼が現れる。

対して、イブリースは右手に雷を集め、雷の剣を構成する。

「テメエ、何者だ？」

「一応、『イブリース』と名乗っておこうか」

王我は翼を振るい、魔力の衝撃波を生み出す。
ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ
ッ！！ と魔力の衝撃波は地面を抉り、イブリースへと迫る。

「遅い」

ポツリとイブリースは呟くと同時に消える。

王我はやはり、イブリースを見失う。

そして、イブリースが現れた場所は、王我の背後。

剣が、放たれる。

しかし。

「遅いのはそつちだろ。カスが」

ぐるんっ、と王我は半回転し、剣をかわす。

そして、半回転と同時に翼をイブリースへと叩きつける。

「がつ！？」

ズザザザザツ、とイブリースはなんとか踏ん張る。

「バカな……キサマには、見えていないハズだ」

「ああ。見えなかった」

「ッ！？」

「けどよ、『大体どこから来るかは解る』」

観察眼。

王我は相手の行動を観察、そして得た情報^{データ}を元にイブリースの行動を予測し、反撃した。

観察、と言っても相手は文字通り『一瞬』で動いていたため、あまり情報は得られなかっただろう。

しかし、その少ない情報の中で王我は相手の行動を予測し、反撃したのだ。

王我が現在、学年順位第一位という位置に居るのは、圧倒的な魔力、だけではない。

そもそも、『それだけ』ならば、『高度な応用性』のある学年順位第二位に敗れてしまうだろう。

天性のバトルセンス。

『高度な応用性』を持つ学年順位第二位をしのぐほどの、『圧倒的な応用性』。

全てにおいて、学年最強。

ゆえに、学年順位第一位という位置にいるのだ。

「なるほど、な」

バチツ、と再び紫電が唸る。

瞬間、ババババババババババババババババババババババツ！！
とイブリースの周囲に雷が展開される。

「その魔法、まさか操作系か？」

「そうだ。操作系魔法の上位種。『雷操作魔法』だ」

操作系魔法。

それは魔力により様々な『物体』を操る魔法だ。

そして、操作系魔法には、その上位互換として『魔力操作系魔法』という物が存在する。

例えば、学年順位第二位の水面鏡花。

彼女の魔法、『水操作魔法』も操作系魔法の上位種、魔力操作系

魔法に位置する。

ウォーター・オペレーション
『水操作魔法』のランクは『S』。

魔力操作系魔法のリングは全て、ランクは『S』だ。
よって。

「そして、この『雷操作魔法』サンダー・オペレーションのリングのランクは『S』だ」
「そうか」

と、王我は『笑った』。

瞬間、ゴツ！！！！！！！ と王我の魔力が跳ね上がる。

「そつでなけりゃあ、面白くねえッ！！」

ガンッ！ と王我は地面を抉り、加速する。

一気にイブリースとの距離を縮めるが、それでも。

「やはり、遅いな」

イブリースの方が、圧倒的に早い。

一年最強の王我でも、『スピード』という一点においては、イブリースの方が上だ。

イブリースは雷剣を振る。

ただの雷剣ではない。

雷を『操作』し、形を大きく変え、攻撃範囲の広がった雷剣だ。
さっきのように半回転しただけでは、かわせない。

いくら攻撃方向が予測できるとはいえ、反応が間に合わなければ
ダメージは免れない。

さつきかわす事が出来たのも、剣という形態に留めていたため、
攻撃範囲がやや狭かったからといえる。

「終わりだ」

「ッ！！」

雷剣が、振るわれた。

そして。

『かわした』。

「何ッ！？」

「隙だらけだぞ」

「ッ！？」

イブリースの懐に飛び込んだ王我から、ゴバツ！！ と翼が振るわれた。

翼はガード出来ずに、直撃した。

しかし、イブリースもそれだけでは終わらなかった。

体が空中に叩きつけられた瞬間、展開していた雷剣を、王我へと投げつけた。

不意をつかれた。

しかし。

それでも冷静に、王我は体を少しひねるだけで、かわした。

そしてその間にイブリースはくるん、と空中で一回転し、着地する。

ダメージは、勿論あった。

「キサマ……………見えていた』な？」

「ああ」

そう言った王我の目は、『血のように真っ紅に染まっていた』。
これは、血龍の能力によるものだ。

今の王我は、比較的に動体視力が強化されている。

集中の度合いによって見える物は違ってくるが、これにより文字通り光速で動くイブリースの動きを捉える事に成功したのだ。

「その『消える』動き。見たところ、電気信号を操っているのか？」
「……そうだ。反射神経、というのは知っているな？ 反射神経は要するに『脳からの命令のショートカット』だが、俺の魔法の場合、魔法により電気信号を構成する事で、脳の命令を待たずに『直接』行動に移す事が出来る」

『ショートカット』はあくまでも『近道』だ。
しかし、この魔法の場合は『近道』ではない。
いかなればスタート時から既にゴール地点に居るような物だ。
反射神経を超える反射神経。

「『超反射神経』、とでも言おうか」

この時点で。

王我はある一つの疑念を抱く。

おかしい、と。

現在、状況的に有利なのは王我の方だ。

しかし対してイブリースは自分の魔法の応用技の仕組みが相手にバレてしまっている状態なのだ。

そんな状況で。

イブリースは冷静に居た。

(なぜだ……まだ何かあるのか？ ……それとも)

王我はある一つの考えにたどり着く。
自分の魔法の応用技の仕組みを相手に理解されている状態。
この状況で冷静に居られる理由。
まだ切り札があるのか、それとも。

自分の魔法が相手に理解されていても、問題が無いのか。

「疑問を抱いているな？」

「.....」

考えを、読まれていた。

「なぜ俺がペラペラと自分の魔法の応用技の説明をしていたと思う？」

嫌な予感が、王私の脳裏をよぎる。

「なぜなら、」

バチツ、と紫電が唸る。

「俺の魔法の応用技の仕組みを理解された所で、問題が無いからだ」
嫌な予感が、的中する。

「いくぞ。これが.....『全力』、だ」

瞬間、イブリースは姿を消す。

王我は集中する。

イブリースの姿を捉えようとする。

叫ぶ。

そして、ブンッ！ と翼を振るう。

しかし、イブリースは軽くそれを避ける。

消えたと思った瞬間には、王我の腹部をイブリースは蹴り飛ばしていた。

「がッ……………!!」

無様に地面にバウンドし、転がる。

「ッ……………!!」

王我はなんとか立つが、先ほどの雷剣のダメージは大きい。立つ事すら、困難だった。

「さあ、まだ俺の『全力』は始まったばかりだぞ。一年最強」

イブリースは一步一步、王我へと迫る。

そして王我の後ろには、桜が居た。

王我は、桜の前に立ちふさがるようにイブリースと対峙する。

第五話 雷操作魔法（後書き）

補足ですが、『魔力操作系』の魔法は『雷操作魔法』、『水操作魔法』以外にもまだ種類があります。

そして、王我以外でのメンバーで、一番魔法の応用に長けているのは水面です。次に倉井、といった具合です。

第六話 状況の逆転

早い。

そう、神使は呟く。

視界で捉えられている程の距離には、いる。

現在、神使とラーヴァナの距離は一定に保たれている。しかし。

ラーヴァナの場合は、光を背負ったままだ。

勿論、神使も全力で飛んではいる。

それでも、『距離は一定に保たれているまま』なのだ。もしも。

ラーヴァナが全力で逃亡すれば、あっという間に引き離されるだろう。

いや、『逃亡』などという手段は使わなくても、実力で戦えば恐らく敵しいだろう。

(くそつ。このままじゃラチがあかねえ)

神使はチラリと学生服のポケットへと目をやる。

その中に収められているのは魔神のリング。

現在発動出来る憑依魔法は赤と緑。

発動すれば、一気に距離を縮められるかもしれない。

しかし、そうやすやすと憑依魔法は発動出来ない。

時間制限。

憑依魔法は発動と同時に魔神の力を憑依させる事が出来る、が、それと同時に莫大な魔力を消費する事になる。

そして憑依魔法の発動限界時間は、現在の神使には五分が限界だ。五分が過ぎれば憑依魔法は解除され、魔力もほぼ底をつくだろう。強力な切り札。

そしてその切り札をどの場面で切るか。

この判断によって、光を取り返せるかどうかが決まる。

(とにかく、今は距離をつめる事に専念しねえと)

神使は魔力を上げ、加速する。

さつきまでは『現存の魔力での全力』。

そして、今は更に『魔力を加えての全力』。

通常、リングから魔法を発動するには『魔力』が必要だ。

これは言い方を変えれば『生命力』、『生命エネルギー』とも言える。

つまりリングは、その『生命力』を『魔力』に変換する事が出来る。

そして発動された魔法は、発動時に注入された魔力のみで発動する事になる。

しかし、そこから更に魔力を与える事で、その魔法は威力を上げてゆく。

神使の背中の雷の翼の魔力が上がる。

そして、加速する。

ゴッ！！ と神使は加速し、ラーヴァナとの距離が縮まる。

まだまだ魔力を上げていく。

魔力を加えていく、という事はそれはつまり体力の消費を意味するが、憑依魔法を発動するよりは消費魔力が少なくて済む。

ラーヴァナは加速を行わない。

その紅い剣を片手に、そしてもう片方の手に光を支え、建物と建物の間をスイスイと飛んでゆく。

(加速しない？ なぜだ？)

疑問が頭をよぎるが、しかし、チャンスだ。
徐々に加える魔力を上げていく。

同時に、加速する。

加速と共に、距離も縮まる。

ラーヴァナはもう、目前に迫っていた。

(いけるッ！！)

赤魔法を構える。

そして、拳を振るう。

ラーヴァナは右手で光を支え、そして左手でブラッド・レインを
構えている。

ならば。

(狙いは、あの紅い剣だッ！！)

今ならまだラーヴァナも神使に背後を見せている。

これこそまさに、絶好のチャンス。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！」

神使が赤魔法を、放つ。

しかし。

「面白いぐらいに単純だな。オマエ」

そう呟くと同時に、くるん、とラーヴァナは体を半回転する。

同時に、放たれた赤魔法を左手に構えていたブラッド・レインで

弾く。

神使の体勢が、崩れる。

あらかじめ予想されていた展開。

作られたチャンス。

赤魔法は弾かれ、右腕は反応が来ない。

また、左手は『K』のリングをはめているため、左腕自体にはなんの魔法もかかっていない。

つまり、完全に無防備な状態なのだ。

「くっ!!」

「敵にそうやすやすと背後をとらせるワケねーだろ！」

ゴッ、とラーヴァナは神使の腹部に蹴りを与える。

「がっ!!」

「ははははははははははッ!!」

衝撃で、神使は落下する。

高笑いと共に、ラーヴァナとの距離が開く。

「ぐっ……. があああああああああああッ!!」

ぐるんっ、とムリヤリ空中で体勢を立て直す。

そして真下にあったビルの屋上にだんっ！ と着地する事に成功する。

「あっはっはっはっ!! やるじゃねえかッ!! まさか空中でムリヤリ体勢を立て直すとは思わなかったぜッ!!」

「……………ッ!!」

楽しそうにするラーヴァナとは違い、神使の中にあるのは、焦り。再び両者の距離が開いてしまった。

このままでは、ラーヴァナの逃亡を許してしまう。

「はッ。そんなに気になるのか？ この女が。それなら、よ

フッ、とラーヴァナは、『抱えていた光を手放す』。

「なあッ!?!」

当然、落とされた光はそのまま地上へと落下する。

(間に合えッ!!)

ゴッ!! と神使は腹部へのダメージを忘れ、一気に加速する。

ふわっ、と神使は両腕で光を支え、隣のビルへと着地する。

「くそっ。アイツ、一体何を……………」

言葉が、途切れる。

神使の視線が凍りつく。

そもそも。

ラーヴァナが光を落としたのも、全ては光を奪うため。ゆえに。

まずは光を落とし、神使に受け止めさせる。

そうする事でラーヴァナは身軽になり、そして神使は重荷を背負う事になる。

ラーヴァナは狂ったように、笑う。

「やるじゃねえかあッ！！ おもしれえっ！ 本当はすぐにでも合流ポイントへと向かうつもりだったが、楽しくなってきたぜッ！！

俺のコードネームは『ラーヴァナ』！ さあ、もっと楽しもうじやねえかッ！！ 魔神のガキッ！！」

「はっ。うるせえよ。こっちはとっとと帰りたいんだ。光さんと一緒にな」

ガシャツ、と神使は紅い剣を構える。

光は取り戻した。

後は、ラーヴァナを倒すだけだ。

第七話 戦闘終了

ざりっ、ざりっ、とイブリースが王我へと迫る。

もうイブリースは桜を見てはいない。

桜の前に居る、王我を見ている。

王我を倒せば、桜の回収は簡単だ。

超反射神経を使って背後に回りこんで首筋に手刀を打ち込み、気絶させてやればいい。

目の前に倒れている王我を見下ろし、イブリースはバチンツ！と手に雷の剣を構成する。

「終わりだ。王我龍鬼」

勢い良く剣が振り下ろされた。

ザンツ！！ と雷の切っ先が貫いたのは、

地面のコンク

リート。

「何？」

消えた。

そう、イブリースは判断する。

辺りを見渡すと、イブリースの背後に、王我が立っていた。

「なっ

」

「遅い

」

超反射神経で回避しようとするイブリースだったが、王我はそれよりも早く、拳を振るう。

ゴッ！ と王我の拳が、イブリースの顔面を捉える。

鈍い音を立てて、イブリースが宙を舞う。
しかしイブリースは空中ですぐさま体勢を立て直し、地面になんとか着地する。

「くっ………!! ツ!？」

イブリースが王我を見つめる。

さっきまで全く超反射神経についてこられなかった王我を。

そして、さっきまでの王我とは、様子が違っていた。

いや、正確に言えば、変化していた。

その理由はその腕と足。

両腕、両足共に真っ紅な魔力によって覆われている。

「リミッターを少し解除した」

王我は呟く。

一歩一歩イブリースに近づく。

そして、ガンッ!! と轟音を立て、王我が消える。

紅い魔力によって強化された足。

それが、地面を抉り、王我を加速させる。

「ッ ……!!」

イブリースは超反射神経を発動しようとするが、王我の足が、イブリースの腹部を捉える。

王我はそのまま、イブリースを蹴り上げる。

「がッ………!!」

今度は体勢を立て直す事が出来ずに地面をバウンドする。

「おい。」「自慢の超反射神経を発動させなくていいのか？」
「ッ……………」

何もいう事が出来ないイブリースを見て、王我は満足そうに笑う。

「違うよな？」「発動しない」じゃねえ「発動出来ない」んだよな
あ？」

そう。

「発動しない」のではなく、「発動出来ない」のだ。
その理由とは、

「そもそも。反射神経つーのは外部情報があつてこそだ。オマエは『俺という外部情報』を元にその超反射神経を発動させていた。だったら、『俺という外部情報が得られなかったら』御自慢の超反射神経は発動出来ないっつーワケだ」

通常の反射神経、というのは例えば人が沸騰したヤカンを触れば、『熱い』という外部情報が伝わり、電気信号のシヨートカットにより反射神経が起こる。

『熱い』という外部情報が無ければ、そもそも反射神経など起こる事が無い。

そしてイブリースの超反射神経も、『王我という外部情報を視認する事』で発動する。

ゆえに。

『王我という外部情報が視認する事が出来なければ』、イブリースのま超反射神経は発動しない。

「だったら、オマエが俺の姿を捉える事が出来なければ、意味ねえ

よな？」

「くっ………!!」

今とさっきとは、状況が違う。

そもそも、イブリースは超反射神経を使った時点で、短期決戦を行わなければなかった。

イブリースの魔法は『サンダー・オペレーション雷操作魔法』。

『超反射神経』、というのはあくまでも『応用技』で、副産物なのだ。

イブリースの応用技、『超反射神経』の場合、電気信号に影響しているため、緻密なコントロールを必要とするために、精神的な疲労も少なからず出る。

それに加え、膨大なる魔力を消費する。

そして、今のイブリースに再び超反射神経を発動させる魔力は残されていない。

その事は、王我は既に気付いていた。

王我はそれを踏まえて、イブリースに言い放つ。

「チエックメイトだ」

ゴバツ!!!!!!!!!! と、翼がイブリースにむけて振るわれた。

ガギイッ!! ゴギイッ!! と二つの紅い刃が交錯する。

「くっ!!」

現在はなんとか『拮抗』という状況だ。
しかし。

ラーヴァナが本気を出せば、恐らく今の状況等など、簡単に崩れてしまうだろう。

その気になれば、簡単に崩れるであろう状況。

そして、神使には『憑依魔法の限界時間』という条件がある。

現在、（ラーヴァナが本気を出していないとはいえ）なんとかこの『拮抗』という状況も、憑依魔法があるからこそだ。

憑依魔法が解除されれば、この状況も簡単に崩れ去る。

それはすなわち、光を守りきれない、という事にもつながる。

（させるかよ……………）

ギリツ、と神使は剣を握り締める。

（もう……………守りきれないなんて事は、イヤなんだッ！！）

ゴッ！！ と神使は魔力を上げる。

守るために。

あの時のような思いをしないために。

そして、神使は翼の力で加速する。

ラーヴァナへと立ち向かう。

ゴアッ！！ と炎の魔力が剣を取り巻く。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおッ！！」

ゴッキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッ！！ と

憑依魔法の紅い剣と、ブラッド・レインが激突する。

神使の渾身の一撃。

落下してゆく神使を見つめるラーヴァナ。

「さて、そろそろ目的のブツを回収するとするか」

チラリとビルの屋上に居る光を見つめる。

そこで。

携帯から着信音が響く。

「んあ？」

携帯を取り出し、通話を行う。

「撤退してください」

「は？ 目的のブツはすぐそこだぜ？」

「イブリースがやられました。それに、アームド・アームズ武装兵器も」

「はっ。まだまだツメが甘いねえ。アイツも。けどよ、俺の撤退とイブリースがやられた事についてはなんの関係性がある？」

「夕羽神姫が動き出しました。どうやら、別部隊が全滅させられたようです。そちらに向かっています」

「ああ。あの生徒会長ねえ。面白そうじゃねえか」

「不要な戦闘は慎んでください。それに、」

ピシッ、とラーヴァナの持つブラッド・レインに亀裂が入る。

「今の状態では、戦闘は困難と思われます」

「………ハイハイ」

呟くと同時にラーヴァナはポケットから一つの小瓶を取り出し、潰す。

同時に魔法空間が現れ、ラーヴァナはその中に消えて行った。

戦いは、終わった。

第八話 少年達へのささやかな報酬

あれから。

王我は疲労とダメージにより、イブリースを倒した後すぐに倒れた。

そしてすぐに駆けつけた夕羽により、桜と共に回収された。

神使は、アイテム・アームズ武装兵器の破壊に成功した倉井と合流。

こちらは、駆けつけた白川が回収しようとしたのだが、神使はただ一言、「今から下校します」とだけ言って、目覚めた光と共に、下校していった。

こうして、少年達の放課後の戦いは、ひとまずの決着を迎えた。

ズキリ、と痛みが走る。

意識がはつきりしてくると、体の所々が痛んでいる、という事が解った。

うつすらと、その思い目蓋を開く。

王我は、部屋の中に居た。

あたりを見回すと、そこは見慣れた自分の部屋。

ようは、自宅に居た。

今はどうやらベッドの上で寝ているようで、体の所々に包帯が巻かれていた。

状況があまりさっぱりと掴めなかったが、少しずつ、過去の記憶を頼りに思い出す。

「……………そうだ……………俺は……………」

仕事をしていたのだ。

なぜ、自分がその仕事をしようと思ったのか、なぜ、少女の前に立ったのかは解らないが。

「.....」

自分の行動理由が解らない。

答えはもう、つかんでいる気がするのに。

それでも、解らない。

むくり、と上半身を起こす。

すると、そのタイミングを見計らったかのように、ガチャッ、と部屋のドアが開いた。

王我は不信に思った。

なぜなら、この家には 月無学園の管理するマンションには、王我以外の人物は住んでいないからだ。

「あっ。起きたんですね？」

部屋に入ってきたのは、桜だった。

「なあっ!?!」

「うっ。ど、どうしたのですか？」

びくっ、と肩を震わせてビックリする桜。

(いや、ビックリしたのは俺のほうだぞ!?!)

王我はじろりと桜をにらむ。

しかし、桜はニコニコとしながら手にはお盆と、その上になにやら皿が置かれている。

「…………お前、なぜココに居る？ 一応言っておくが、ここは俺の家だぞ？」

正確には、月無学園の物だ。

「えっと、だから、なのですが」

「要領を得ないのだがな」

すると、急にタイミング良く王我の携帯が鳴った。

王我は携帯をつかみ、相手を確認する。

電話をかけてきたのは、夕羽だった。

(あの野朗…………まさか…………)

通話ボタンを押し、携帯に耳を傾ける。

「あつ。そろそろ起きた？」

「テメエの差し金がこの野朗」

返事を返す事なくすぐさま質問をぶつける。

そして夕羽は、

「当たり前。その子さ、政府のお偉いさんの娘さんだから保護するよ
うにと言われてたんだけど、なにしろ保護する場所に困っててさ。
月無学園の関係する施設って、そうやすやすと用意出来る物じゃな
いんだよね」

「それがなんで俺の家なんだ」

「忘れてないかい？ そこも一応学園の管理するマンションだって
事。まあ表向きには一応一般の人にも貸し出してるんだけどね。い
やあ。君がマンション暮らしで良かった良かった。じゃ、そういう

因みに、光にはさっきの事件の事を一切話していない。
無駄にこれ以上、彼女を傷つける事もないだろうという判断だった。

二人きりの下校。

元々、これが目的だったのだ。

しかし、これだけの為にずいぶん労力がかかったような気がする、と思う神使であった。

会話も無く、ひたすら帰り道を歩いてゆく二人。

普段は二人だけでも普通に会話をする事ぐらいは出来る。

しかし、それはあくまでも学校の中でだけの話だ。

今がチャンス、と思えば思うほど光は緊張してしまつて会話が出
来ずに居た。

対して、神使は今がチャンス　とは微塵も思っていないなかつた。

そもそも、神使は「光のような人物が自分に気があるわけなど無い」というスタンスなのだ。

会話が無いのは実は、憑依魔法による体力の消費によるものだ。
ようは、「疲れて会話をする気力もありません」という事だ。

「.....」

依然、会話は無い。

気がつけば、もう既に二人は、それぞれの家への分かれ道へと差し掛かっていた。

(うう。もうお別れ.....結局何も話せなかった)

(ああ。疲れた。早く家に帰って休みたい)

両者それぞれの思いをさせつつ、分かれ道へと踏み出そうとしたその時、

「光さん」

と、神使はここに来てようやく言葉を発した。

「それじゃ、さようなら」

対して。

光は笑顔で、

「はいっ。さようなら」

とだけ返した。

この時、神使は思った。

自分は、この顔が見たかったから、あんなにも実力差がある相手に立ち向かったのではないのか、と。

簡単な事だった。

二人の少年は、その笑顔の為に戦っていただけなのだった。

ささやかな報酬が、二人の少年達へと与えられた。

第八話 少年達へのささやかな報酬（後書き）

「仕守桜編」 完結です。
次からは新章開始です。

第一話 Shall We tag?

月無学園の学生の間では現在、一つの話題で持ちきりだ。

それは、『一年生タッグ魔法対決大会』。

その名の通り、月無学園の一年生達がそれぞれ出場し、その魔法の技術を競う、ようは参加自由の魔法対決の大会だ。

優勝したタッグには勿論成績に加算されるし、他の先生たちの評価も高くなる。

また、中間テストも免除となるらしい。

そんな餌を学園ではつりさげているものの、生徒達にとってはあまりそんな事は関係無く、ただ純粹に自分の魔法の技術を試したい、という好奇心の方が大きかった。

そして放課後。

月無学園の一年四組では

「翔太あああああああ！！ テメツ、よくも俺の『2』を『J

OKER』で返しやがったなああああああああッ！！」

「ハッ。お前のする事は大体読めるんだよ。ここで勝負に出るっつー事はな」

「ちつくしょうがああああああああああああああああああああああああッ！！」

白熱した『大富豪』が行われていた。

「ち、畜生……………これで十連敗……………」

「約束通り、全員分のジューズおごりだぞ」

「さっさと買ってきなよ」

「なっはっはー。悪いね」

「あのっ。お、お願いしますね」

「お願い」

神使はこれで十連敗。

そして賭けをしていて、十連敗した者が全員分のジュースを買ってくる、という物だった。

そもそもこの賭けは五連敗した神使が十連敗したら全員分のジュースを買ってくるのもう一度やってくれと、何度もせがんだ結果だ。

他メンバーの坂田、風原、紅、光、愛花はそれぞれ好みのジュースを神使に伝える。

そして神使は教室を出て、校舎の外にある購買に向かう。

月無学園に自動販売機はいくつかあるが、どれも全て校舎外に設置されている為、三階の一年生の教室からわざわざ一番下まで降りなければならぬ。

神使はダッシュで自動販売機まで向かう。

一年生の教室から降りた通路では、購買にある自動販売機が一番近い。

なんとかたどり着き、自分の分も含めた六つのジュースを自動販売機から購入する。

「うっ。袋が無いな。こりゃあ持っていくのはしんどいぞ……」

神使はなんとか六つの缶ジュースをムリやり手に収める。

そして再び三階にある教室に戻ろうとすると、

「あら。神使さん。こんな所でどうなさったのですか？」

と、神使に声がかげられた。

ふと声のした方向を見てみると、そこにはなんとも気品のある少女が立っていた。

学年順位第六位の實力を持ち、そして一年三組の委員長を務める美千代みちよけい景子だ。

ふわふわとした長髪が風になびいている。

「美千代さん？ ちょっとトランプで負けちゃって。罰ゲームとしてこうやってジュースを買ってたのさ。じゃあな」

神使は三階の教室に戻ろうとする。

「お待ちください」

美千代が静止する。

「？ どうした？」

「私も、少しお持ちしますわ」

「へっ？」

スタスタと校舎内の廊下を、神使と美千代の二人は歩く。

神使の手には三本のジュースの缶が。そして美千代の手にも同じ数の缶ジュースがある。

「悪いな。なんか手伝ってもらって」

「いえ。これぐらいは」

にこっ、と美千代は笑顔を返す。

「うーん。俺じゃあ大したお礼も出来ないけど、今度またジュースでもおごろうか？」

神使は美千代が金持ちの娘、という事ぐらいは解ってたので、こんな事でお礼として返せるのか解らなかったが、とりあえず誠意だけは見せないと、思った。

「そうですか。それでは、楽しみにしておりますわ」

(あれ。ジュースぐらいでいいのか?)

きょとんとする神使をよそに、美千代は凜とした表情で歩を進める。

そして、三階へとたどり着いた。

四組の教室はすぐそこだ。

「ここまででいいですよ」

「そうですか？」

「おう。さんきゅーな」

「解りました。お役に立てて嬉しいです」

美千代の手から、ジュースを受け取る神使。

そしてそのまま別れようとしたその時、

「神使さん」

と美千代に呼び止められた。

「？」

「あの、今度開催される、『一年生タッグ魔法対決大会』というの

「はご存知でしょうか？」

「ああ。話だけですけど」

神使は返す。

「誰かと出られるのですか？」

「ん〜？ いや、今はまだ」

「そ、そうですか……」

美千代は少しうつむく。

そんな美千代を見て、神使は眉をひそめる。

「どうしたんだ？」

「あの、もしよければ、私と出場してもらえませんか？」

「へっ？ 俺と？」

と思わぬ言葉に首を傾げる神使。

「は、はいっ」

「ん〜……」

どうしよう、と心の中で考える。

そもそも、神使はさっき言った通り『一年生タッグ魔法対決大会』に出るつもりは無かったのだ。

確かに、優勝すれば魅力的な特典があるのだが、神使は自分が優勝出来るとは微塵も思っていないのだ。

第一、見世物になるようなまねは極力したくなかったのだ。

神使は月無学園初の転校生なのだから、目立つのは尚更だろう。

「お、お返事はまた今度でよろしいです。考えてみてください」

っ

そう言い残して、美千代はタタタツ、と三組の教室へと駆け出していった。

神使はそんな美千代の後ろ姿を啞然とした状態で見ているのだった。

「何？ 美千代景子に、『一年生タツグ魔法対決大会』のパートナーに誘われた？」

「お、おう」

教室に戻り、缶ジュース片手にそれぞれ様々な反応を示している。

「そそそ、それって本当ですか！？ 神使君」

光がずいつ、と身を前に乗り出して神使にせまる。

「は、はい」

と神使は少し後ずさる。

「そ、それで、神使君は出るのですか………?」

「うん。まだ返事はしてないんですね」

「そ、そうですか」

ほっ、とする光。

そして意を決したように神使に迫る。

「だ、だったら、私と出てもらえませんか？」
「ええっ!？」

思わぬ発言に、言葉を詰まらせる神使。

(ぐっ。確かに光さんと出るのは嬉しいが、そもそも見世物になるのはなあゝ．．．．．ようやく「転校生」と騒がれるのが収まってきたんだ。ここらでまた目立つのもな．．．．．)

チラリと救援を求めて坂田の方を見る神使。

そして坂田は、

「翔太。私と出よう？」

「ちよつとまで、またその話か。言っただろ。俺は出ないってな」

「そんな．．．．．」

「ぐあっ!？ 畜生！ 泣くのは反則だろ！」

(．．．．．ダメだ。助けにもならない)

二人から申し込まれた。

ここまで来たら、もはや出場は免れない。

気がつくとも風原は帰ってしまったようだ。姿が見当たらない。

光も美千代もなまじ外見が綺麗な分、かえって目立つし、男子共の妬みオーラに耐えなければならぬ。

神使としても、こんな状況は極力避けたい。

出るにしてもせめて、男子にしたい所だとチラリと紅を見る。

読書に勤しんでいる紅が神使の視線に気づくと、ふうっ、とため息をつき、パタンと本を閉じた。

「ごめんね。光さん。浩助は僕と出る事になってるんだ」

「ふえっ? ほ、本当ですか!？」

うるっ、と瞳をうるわせる光。

神使はそのままなごしに耐えながらも、紅の策に乗る。

「は、はい。すみません」

「そうですか……」

しゅん、と光は少し落ち込んだように気を落とす。

こうして、神使浩助の『一年生タッグ魔法対決大会』出場が決まった。

第二話 第二の転校生

月無学園では現在、『一年生タッグ魔法対決大会』に加えて、新たな噂が舞い込んできた。

それは、第二の転校生。

第一の転校生、というのは勿論神使浩助だが、それに次ぎ、新たに転校生がこの月無学園にやってくるというのだ。

噂にならないわけが無かった。

そもそも、魔法学校として名をはせるこの月無学園に、転校生がやってくる事が異常なのだ。

そんな異常なケースが、年内に二度も起こる。

学園全体の注目を集めるのも無理は無かった。

その噂は、月無学園第一学年最強の少年、王我龍鬼の耳にも入ってきていた。

というより、聞きたくなくても耳に入ってくる。それぐらい、噂になっているのだ。

しかし、王我にとってそんな事はどうでもよかった。

王我の頭の中は現在、ある一人の少女の事で一杯だからだ。

因みに言うと、『頭の中は現在、ある一人の少女の事で一杯』という言葉には、王我にとって恋愛的要素など微塵も含まれていない。

というのも、現在あの少女と共に生活しているのだが、事ある事に世話をやいてくる。

そんな少女が王我にとって邪魔以外の何者でもなかった。

自分のペースを乱すあの少女。

自分に出来ない笑顔を向けてくるあの少女。

自分に対して無駄に世話をやいてくるあの少女。

ここ最近、王我は自分のペースを乱されっぱなしだった。

そのせいも、どうも朝から体に力が入らない。

一年一組。

一年最強と比喻される教室で、一年最強の少年は自分の席で突っ伏していた。

手には血のように紅く輝く一つのリング。
少年を最強にしている一つの魔法の象徴。

そして、唐突にチャイムが鳴る。

朝のHRを知らせるチャイムだ。

ざわざわと教室が騒ぎ、それぞれ自分の席へとついてゆく生徒達。
しばらくして、一組の担当教師が教室に足を踏み入れた。

「静かにしてください。突然ですが、転校生を紹介します」

ざわつ、と教室中がざわめく。

転校生、という言葉を聞くと、王我はなぜかあの少年の事を思い出す。

目の前の傷つき、倒れた仲間を、少女を守るために立ち上がった少年。

実力差があると知りながらも、自分に必死に立ち向かってきた少年。
強い意志を宿した瞳を持つ少年。

「……………チツ」

思わず舌打ちをしてしまう。

しかし、そんな王我の心境とは裏腹に、噂の転校生。それが、教室のドアの外に居ると言う期待と言う名の空気が教室中に漂う。

クラス中に緊張の空気が漂う所を見計らって、担当の教師がドアの外に向かつて視線を向ける。

「入ってきてください」

「はい」

声からして、性別は少女の物だった。
そしてドアがガラツ、と開き、転校生である少女が教室に足を踏み入れる。

教室中の生徒が、息を呑んだ。

少女は一言で言うなら、『とても美人』だった。

ふわふわとした長い髪。

整った顔立ち。

無邪気な瞳。

クラスの男子は息を呑み、そして女子すらもその美しさに見とれている。

王我も、視線が釘付けだった。

別の意味で。

(なっ、なんで………)

その転校生の顔を、王我は知っていた。

その転校生は、王我は毎日顔を合わせている。

その転校生は現在、自分の家に居るものだと、王我は思っていた。

そして、転校生は口を開く。

「仕守桜です。よろしくお願ひします」

ペコリと礼儀正しくお辞儀をした後、桜は呆然とする王我を見つけると同時ににこっ、と微笑んだ。

「 temeエ。 どうして月無学園に転校してきやがった」

「はあ。どうして、と言われましても」

「ちょこん、と桜は首を傾げる。

現在、王我と桜は屋上に居る。

それというのも、桜が自己紹介をした後、王我の顔を再び見つけるや否やにこにこと微笑み続け、わざわざ王我の隣の席を確保し、再びその笑顔を王我に向けてきた。

そうなれば、噂の美少女転校生が一年最強の少年とどんな関係が！？ という噂が立つのは至極当然の事であった。

よって、昼休みに入ると同時に桜を屋上に引っ張り出してきた、というワケだ。

「お父様からここに転校するように手続きが済まされていました」

とありのままの事実だけを説明する。

「………チツ。そーいやあ。生徒会 teme の保護を依頼したのも、その『お父様』とやらだったっけか」

と王我は桜と初めて出会った時の経緯を思い出す。

「だったら、なんでその事を言わねえ」

と王我は桜に向かって問いただしたが、桜はにこっ、と微笑んで、

「だって、ビックリさせたかったのですよ」

とだけ言った。

満面の笑みで。

「……………」

ゴツツ、と思わず桜の頭を軽く小突く。

「痛っ」

「なんかムカつく……………オイテメエ」

「はい？」

「まさかとは思うが、この学校に来たのなら、魔法リングを持ってるな？」

王我の問いに、桜は正直に答える。

「はい」

「いつからだ」

「この学園に来る二日前です。部屋のお掃除をしていると、夕羽さんという方が届けてくださったのです」

「何？」

王我は眉をひそめる。

魔法を使う際には、リングから結界を展開しなければ魔法は使えない。

そして、結界の中に存在出来るのは、リングを持つ者だけ。

そもそもリングは、人間の生命エネルギーを魔力に変換する物だ。結界の中にはリングを持つ者、つまり、魔力が無ければ存在出来ない。

よって、リングが無い状態では生命エネルギーを魔力に変換する事が出来ず、結界の中には存在出来ないはずなのだ。

しかし。

桜がリングを手にしたのは二日前。

そして桜が襲撃を受けたのはそれよりも前だ。

つまり、あの時結界の中に居た桜は、リングを持っていない状態

で結界の中に存在していたという事になる。

「どついう事だ．．．．．?」

王我は無駄だと解りつつも、思考を続ける。

自分にはまだ理解不能の、魔法に隠された力を。

放課後。

光は、トボトボと校舎を歩いていた。

日直当番だった光は、職員室に日誌を戻しに向かったのだが、心ここにあらず、といった様子だ。

(うう)。まさか仕守君に先を越されるなんて．．．．．思わぬ伏兵です．．．．．油断してました．．．．．)

どうやら『一年生タッグ魔法対決大会』のパートナーに神使を誘ったものの、断られた事が相当ショックなようだ。

ふと前を見てみると、同じように少ししょんぼりとした美千代が前から歩いてきた。

光は神使が三組に行ってくるといつて教室を後にした事を思い出す。

どうやら美千代も神使に断られたようだ。

「．．．．．」

光は意を決したように美千代に近づく。

「あ、あの。美千代、さん？」

「……………あら。光さん。どうしたの？」

そして光は美千代に神使に『一年生タッグ魔法対決大会』のパートナーを断られた事を説明する。

「と、言うわけです」

「そうですか。仕守君と……………」

光はじつ、と美千代を見つめる。

そして同じように光を見つめる美千代。

「……………」

「……………」

沈黙。

そして、

「あのっ」「

と二人は同時に沈黙を破った。

「……………どうやら、考えてる事は、同じようですね」

「……………そうですね。光さん。共に、『一年生タッグ魔法対決大会』に出てくださらない？」

「勿論です」

第一学年順位四位と第六位の少女が、手を組んだ瞬間だった。

第三話 それぞれの準備

「ねえ翔太」

「なんだ」

坂田と愛花は二人並んで帰り道を歩く。

坂田は正直乗り気では無いが、愛花とは家の方向が同じなので仕方が無い。

「今度開催される『一年生タッグ魔法対決大会』って知ってる？」

「ああ。あの魔法対決の大会だろ？ それがどうかしたか？」

以外だな、と坂田は思った。

まさか愛花の方から『一年生タッグ魔法対決大会』の話が出てくるとは思わなかったからだ。

次々と愛花に申し込んでくる男共を拒否しまくっていたのを見ていたから、てつきり興味が無いものとはばかり思ってたからだ。

「一緒に出よう？」

「断る」

「それは無理。エントリーしておいたから」

「何イ！？ 確かタッグ大会に出るには専用の申込書にそれぞれ出場する生徒二人の直筆サインが必要なはずだぞ！？」

「サインの件なら大丈夫」

さつ、とカバンから愛花が取り出したのは、『一年生タッグ魔法対決大会』のエントリー用紙。

そして真っ白な紙の上に、愛花の名前と坂田の文字が燦然と黒く輝いていた。

「偽造したのかあああああああああああああああああ！」

坂田は道のご真ん中であるにもかかわらず叫び声を上げる。

(くそっ！ 一体何処でそんな技術を覚えたんだ！？ しかし最悪途中でバツクれば……………)

「因みに逃げたら、……………後でおしおきだから^{デート}」

坂田の胸中を読み取ったのか、愛花が『本気の殺意をこめた目で坂田を見つめる。否、凝視する。』

どうやら逃げ切れそうに無いみたいだな、と坂田は観念した。心の中では強敵が出てこないように祈っていた。

「ち、ちょっと時止」

「ん？」

現在、水面と時止は教室で居残りでの掃除をさせられていた。それというのも、日直である時止の掃除を水面がムリヤリ手伝っているだけなのだ。

水面は掃除開始当初からチラチラと時止の方を見ている。

(い、今がチャンス……………周りに誰も居ないし、誰かに聞かれる心配も無い……………)

そして時止の方はというと、じっと床を見つめてさっさと手を動かし、箒でゴミを掃いている。

水面も真面目に掃除をこなしつつ、そのチャンスをうかがう。

そして、掃除が一段落した頃、

「『一年生タッグ魔法対決大会』って、知ってるわよね？」

水面は出来るだけ自然に、唐突に切り出した。

「ああ」

当たり前だが、時止もこの事は知っている。

そして問題は次の質問だ。

「あ、アンタは出るの？ もうペアが決まっているとか？」

「？ いや。居ねえけど」

「そ、そう」

ぱあつ、と表情が明るくなるのが水面じぶんでも解った。

そしてすぐに調子をたて直し、

「じ、じゃあ私と一緒に……」

「ま、俺はパスしようかと思ってい……」

水面は時止がそのセリフを言い切る前にムリヤリ言い出す。

「出るわよね？」

時止からしてみればもはや脅迫だった。

(ヤバイ……何故だかしらんがこれはヤバイぞ……)

いや、でも俺はあんなめんどくさいもんに出たくはねえんだよ

「いや、だから俺は今回……」

「出るわよね？」

「……………はい」

圧倒的な水面からの威圧感により、断りきれずに了承する時止であつた。

王我は現在、自宅のリビングのソファに座りこんでいた。

リビングの前の方にあるテレビは夕方からのニュース番組が垂れ流しとなっていたが、それはなんとなく視界に入る程度の物で、王我には全く気にもとめていなかった。

「一緒に出ましょう？」

「却下だ」

目だけはテレビの方に向けながら、そして桜の方には一切見ないままで、王我は何の申し出かどうかの内容を聞かずに却下する。

いや、聞かなくても内容は解っていた。

一緒にと言った時点で『一年生タッグ魔法対決大会』の事を指していたというのが解つた。

「なんでですか!？」

いかにも『ガン』というような効果音が似合いそうな表情をする桜。

「あのかなあ……………」

王我は、はあっ、とため息をつきながら説明する。

「俺はそもそも生徒会の仕事があるんだよ。そんなもんに出てる暇はねえ」

生徒会はこういった行事の際には進行と、会場の警備がある。

なまじ『魔法』という特別な力を持つている分、学生という中途半端な人間ではすぐに暴走してしまう恐れがある。

よって、生徒会という抑止力が必要なのだ。

実力者が集まる生徒会がその役割を担うのは当然の事だ。

そして王我はふと、脳裏に思い浮かべる。

ある転校生を。

(万が一アイツと当たるのも、面倒だしな)

そんな王我の側では、エントリー用紙とにらめっこする桜の姿があった。

「はあ。まさかこんな事になるなんてなあ……………」

神使は、紅と共に下校していた。

『一年生タッグ魔法対決大会』に自分が参加する事になったので、その足取りは重い。

「そんな事も言ってもらえないよ」

「何が？」

「『一年生タッグ魔法対決大会』なんて物に出る事になれば、多分、魔神が君のリングを狙って妨害してくる事だって考えられる。貴重

な魔神せんりよくのリングをせいぜい奪われないように注意する事だ」

スタスタと紅は凜とした表情で歩く。

その瞳には様々な事を想い、考えている事が神使には解った。

「それならそれで、逆に返り討ちにしてやるよ」

神使は魔神のリングをはめた手で拳を作り、ぎゅっ、と握り締める。

リングが、夕日に反射してキラキラと輝いていた。

第四話 集結する三人の魔神

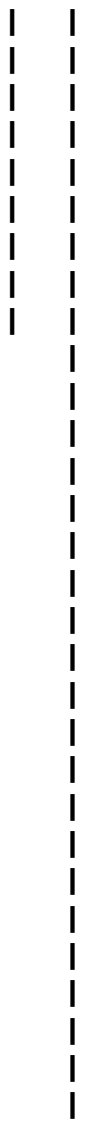
一年生タッグ魔法対決大会の日がやってきた。大会運営の為、授業は行われない。生徒達はそれぞれの教室に完備されたモニタで試合の様子を見る事が出来る。

そして、大会に出るにはまずは予選を勝ち上がらなければいけない。予選自体は既に、前日に行われており、予選を勝ち上がった計六ペアが本選で戦う事が出来る。

当然、神使と紅のペアは勝ち上がっており、現在は出場選手用の控え室に、紅と共に居た。

「はあ。まさかあいつ等も参加してるとはな」

ため息をつきながら、神使は手元にあるトーナメントの組み合わせを見る。



・一回戦/A

光琴音・美千代景子ペア VS 仕法弦他・生田正二

・一回戦/B

神使浩助・仕守紅ペア VS みなかたたいち南方太一・あまのしゅく天野疾駆ペア

・一回戦/C

坂田翔太・心愛花ペア VS 時止進・水面鏡花ペア

因みに、一回戦/Aは既に終了している。試合開始直後、光の『全てを破壊する暗黒龍』のリングの強力な魔法弾が相手ペアに炸裂。その隙を逃さず、美千代の『武器庫魔法』による連続攻撃で一気に試合終了。

よく魔法対決に用いられる『判定玉』を、この大会にも使用するのだが、雷炎コンビの『判定玉』はあつという間に真っ赤に染まった。

そして現在、神使達の試合を控えている、という状況だ。

「はあ。しかも相手は学年順位第三位ときた。いくら作戦の為とは言え、こんな大会出るんじゃないかな」

「こつなつたら覚悟を決めた方がいいよ。ま、最悪負けてもいいんだし」

「それはイヤだ」

きつぱりと言い放つ神使。負けず嫌いなだけに、ここは引き下がれなかった。

「第三位って、どんな魔法を使うんだ？」

「一学年順位第三位、一年一組、天野疾駆。所持リング数は一。使用魔法は『神速』。これが僕の知っている第三位のスペックだね」

「神速？ どんな魔法なんだ？」

「簡単に言えば、高速で動く事の出来る、風属性最高クラスの魔法だよ。風を操り、操作し、自身のスピードを加速させる魔法。発動

すればまず捉える事が難しくなる」

『神速』と同じく、風属性には同じ最高クラスのリング、『風操作魔法』が存在するが、疾駆の持つリングの場合、少し違う。『風操作魔法』で風を操り、自身のスピードを上げる事は可能なのだが、『神速』の場合は『スピード強化』に特化しているため、得られるスピードの量が違う。

間違いなく、その速さは全魔法中トップクラス。風原の使う『風を呼び込む精霊の靴』の上位互換と言える魔法だ。

「そしてもう一人の南方太一みなかたいちという生徒は学年順位が第八位の実力を持っている。そして使用する魔法は……………」

紅が言いかけた瞬間、控え室にアナウンスが鳴り響いた。

『選手の皆さんは、アリーナに集合してください』

「……………時間だ。行こう」

「お、おお（なんか今重要な事を聞けなかったぞ）」

なんとなくのなりゆきで参加が決まってしまった大会だが、参加するからには勝とう、と心に誓う神使であった。

月無学園アリーナ、会場裏。そこに、三人の人影があった。周囲には他の人間は見当たらない。というのも、現在は時間的にも一回戦／Bが始まるうとしていた為、観客も警備を務める生徒も、アリーナの中を重点的に見渡すようにしているからだ。

三人の人影の内、一人は女、二人は男。特徴的なのは、それぞれの瞳に、それぞれ違う色を帯びていたからだ。

女の瞳は青。二人の男の内、一人の瞳は黄。もう一人の男の瞳は緑、だった。

月無学園一年生タッグ魔法対決大会の会場裏。そこに、三人の魔神が集結していた。

「こうして集まるのも久しぶりだけど、？の魔神……いえ、ここは『ロノ』と言っておきましょうか。アンタ、魔神のリングの坊やにやられたそうじゃない？」

「フン。少し油断しただけだ」

「油断、ねえ。リングを取られておいて？」

「黙れ『カネ』！キサマこそ黄魔法のリングを取られておいて！」

「僕はいいよ。後でどうせ取り返すから。でも『カナロア』。君も気をつけておいた方がいい。あの子の成長スピードは異常だ。せいぜい用心する事だね」

「解ってるわ。それじゃあ、時間になったら開始しましょうか。今度は魔神のリングの坊やだけじゃない。『才』を持つ者と相手しなきゃいけないんだし」

カナロアが言うと同時に、三人の魔神は姿をくらます。

大会の裏で、魔神達が動き出そうとしていた。

アリーナの観客席は、大多数の生徒で埋め尽くされていた。内、大半の生徒が二年生から三年生。恐らく新入生の実力を確かめにき

たのだろうか。

『それでは、一年生タッグ魔法対決大会、一回戦／Bを開始します』

アナウンスが入ると同時に、ワアアアア、と会場が盛り上がる。そして、アリーナ中央に両ペアが並び立つ。

神使がじつと見据えるのは二人の男子生徒。一人は物静かなたずまいで、それでいて鋭い視線をこちらに向けている。もう一人はいかにも熱血キャラ、というような雰囲気を出している。

「なんだか、あの二人からは対照の雰囲気を感じるね」

「そうだな。でもどっちも学年順位TOP十に入るんだよな・・・」

『それでは、結界の展開と同時に、試合を開始してください』

四人はリングをはめている手をすっ、と前に突き出す。

「起動!」「」

アリーナ全体に結界が展開され、試合が開始された。

第五話 神速・瞬間加速

アリーナ全体が結界に包まれる。こうして、生徒達の魔法が発動可能となるのだ。

(とにかく、相手が攻める前に、先手必勝だ！)

神使は右腕に赤魔法を、左腕に黄魔法を発動させる。そして発動させると同時に、黄魔法から雷を疾駆に向けて放つ。

黄色い閃光が、疾駆に向けて放たれる。

しかし。

放たれた雷の先に、疾駆は居ない。

「なっ………があっ!?!」

気づいた時には、既に疾駆が神使の背後から一撃与えた後だった。ぐらり、と神使の体勢が崩れる。

「がっ………!ぐっ………!」

だんっ! と足を踏ん張り、同時に右腕の赤魔法を背後の疾駆に向けて振るう、が。同時に疾駆が消える。いや、まるで消えたかのように高速で移動する。

再び疾駆の姿を見失う神使。そして声が真上から響く。

「遅いな」

気がつくと、疾駆は神使の頭上に飛んでいた。そして疾駆の強烈な拳が神使を捉えようとした刹那。魔法陣が神使の頭上に展開された。紅の防御魔法、『円卓の盾』だ。

ガギギギギギギギギツッ！ と、疾駆の拳と円卓の盾が激突し、何かを削り取るような音がアリーナに響く。

そして遠方の方から、バチイツ！ と、開始直後に放った黄魔法がアリーナに激突し、拡散した音が響いた。

「おおおおおおおおおおおおおっ！」

円卓の盾と疾駆が激突している間に、神使が回り込んで赤魔法こがしを疾駆に向けて、放つ。しかし、フツ、と再び疾駆は自身の魔法、『神速』で回避する。

互いに距離をとる神使と疾駆。

「くそっ！」

「敵はアイツだけじゃねえぞ」

「ッ！！」

ゴアツ！ と神使の前方から、太一が襲い掛かってくる。魔法を使っているかは解らなかったが、拳を構えている。

回避は間に合わなかった。神使は右腕の赤魔法を、太一の放つ拳に合わせて、放つ。

ガツキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イ！！ と、神使と太一の拳が激突する。同時に、両者がそれぞれ
逆方向に弾き出される。

「ぐあっ！！」

「ぐおっ！！」

ずざざざざつ、と手を地面につけて、後ろに滑る体を支える。神
使と太一は互いをにらみあう。

「やるじゃねえか転校生」

「そっちこそ」

ビリビリと、神使の拳がしびれる。どうやら相手の拳の威力は魔
力で強化されており、かなりの威力を誇るようだ。

アリーナに来る途中の廊下でチラツと神使は太一の魔法について、
紅から聞かされていた。太一の魔法は『瞬間加速^{しゅんかんかそく}』。強化タイプに
属する魔法で、強化するのは『スピード』。使用者の『スピード』
を一時的に、強化する魔法だ。

全魔法中最高クラスのスピードを誇る疾駆の『神速』。しかし『
瞬間加速』のスピードは、『神速』の上をいく。

しかし『瞬間加速』が発動出来るのはほんの一秒だけだ。一瞬間
だけ、『神速』を上回るスピードを発揮する事が出来るのだ。

そしてこの魔法は『強化タイプ』に分類される魔法。あくまでも
行うのは強化だ。一口にスピードを強化する、と言っても、例えば
移動する時には『足のスピード』を強化すれば疾駆のように瞬時に

移動するようにも出来る。

しかしそれだけでは無くて、『足で敵を蹴るスピード』も強化出来るのだ。そうすれば、『高速の蹴り』が完成する。

(.....厄介だな。それにまだヤツは魔法を使っていない。いつ来るかが解らない。しかも元々強化タイプの魔法なだけに、魔力による肉体強化もハンパじゃない。けど！)

神使はだんっ！ と前へと踏み込む。迎え撃とうと太一も構えていた。

そこに。

「余所見とは余裕だな」

「ッー!!」

気がついた時には既にもう遅い。疾駆が『神速』で神使の背後に回りこみ、拳を振るう。回避は不可能だ。紅の円卓の盾も間に合わない。

(くっ！ しまっ.....!!)

ドゴンッ！ と拳が、神使に向かって、放たれなかった。

いや、より厳密に言うならば、太一の拳が、疾駆の拳を弾いていた。そしてそのまま太一は疾駆に向けて蹴りを放つ。それを疾駆は『神速』で回避し、距離をとる。

「.....は？」

突然の出来事に、神使はぽかーんと口を開いていた。

(何かの罠か？ いや、それにしては……………)

神使はチラリと疾駆を見るが、疾駆もどうやらワケが解らないらしい。不審な表情を見せている。

「南方。どういうつもりだ？」

「それはこっちのセリフだ天野！ 今、俺と転校生が戦ってるんだ！ 途中から割り込むな！」

「お前だって最初割り込んできただろうが」

「俺に向かつて攻撃しようとしてた転校生に向かつて、いきなりの奇襲は卑怯だろ！ 俺はそんな事してない！」

「……………お前な、これはタッグバトルだ。そんな事当たり前だろ」

「知らんっ！ 俺は転校生とタイムンをはるっ！」

「勝手にしろ」

この二人程、『タッグ』という物には無縁なペアは居ないだろうと思う神使だった。そしてコントのように話し合う二人に向かつてガゴンッ！ と円卓の盾が割り込む。

「さっさと始めよう。時間の無駄だ」

円卓の盾を両手に展開しながら、二人に言い放つ紅。

「……………俺の相手はお前、か」

「そつみただね」

紅は両手に展開している円卓の盾を構える。そして太一は神使をにやりと見つめる。

「さあやるつか。転校生」

「はっ。そうだな。なんだかお前とは仲良くなれそうなのがするぜ」

第六話 暴かれたトリック

ギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリッ！
と、疾駆の拳が紅の『円卓の盾』と激突する。まるで、盾を削る
かのような音がただただ響く。

(さっきから気になってはいたが、この音は………?)

紅の魔法、『円卓の盾』は、あくまでも円状の魔力の盾だ。しか
し、その防御の為の魔力を攻撃の為の魔力に転化する事で、攻撃に
も応用出来る。

それに加え、魔力の量を調節すれば、一定時間展開した場に維持
大きさ、防御力の上昇、そして展開する盾の量の増加も可能となっ
ている。

本来は『円卓の盾』はただの防御壁を展開する魔法だったのだが、
紅は『円卓の盾』を自分なりに応用し、『円卓の盾』という魔法自
体を応用力ある物に変化させる事に成功した。

その事は、学年で第三の実力を持つ疾駆にも察しはついていた。

(なかなかやるな………TOP十に入っていないとはいえ、
実践に関するならば十分にTOP十に入る実力を持っている。あな
どれん。それに………)

フツ、と疾駆は『神速』を発動し、高速移動を開始する。当然、
常人が肉眼で捕らえられるスピードでは無い。勿論、紅にも見えて
はいなかった。

しかし。

ガツギイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイツツ！と、『疾駆の拳と『円卓の盾』が、激突する』
。

(なぜ、俺の『神速』についてこられる?)

ガキユツ、と疾駆と紅が互いに距離をとる。そして紅は静かに疾
駆に問いかける。

「なぜ僕が君の『神速』についてこられてるか不思議そうな顔をし
ているね？」

「.....」

疾駆は何も語らない。しかし紅はそれが自分の問いかけた疑問に
対する答えだと思った。そして、続ける。

「ま、自分で考えてみなよ」

それだけ静かに告げて紅はだんっ！と足を前に踏み出し、駆け
出す。両手に構えた円卓の盾を魔力を纏わせて、回転させる。まる
で全てを切り刻むチェンソーの刃のように、円状の盾の魔法は加
えられた魔力によって振動し、回転する。

(それにしても、こっちにも疑問が一つあるんだよね。こつやつて
円卓の盾を魔力回転させて相手の攻撃と激突すると)

再び疾駆が『神速』によって消える。そして、再び現れる。放た

確認した後は『神速』で高速接近し、確認したポイントを的確に拳や足で撃ち抜く。

しかし逆に言えば、攻撃するポイントを確認する際の視線を読み、攻撃されるポイントさえ解ってしまえば、事前に防御が可能となる。

紅は疾駆が行ってきた数回の『神速』を観察し、この結論に至ったのだ。

(やはり、実践ならばコイツはかなりの実力を誇る……………！)

改めて、紅の実力を再確認する疾駆。対して、紅も疾駆をじつと見つめる。

「君のその『神速』も、どうやら単なる加速魔法じゃないようだ」「やはり、なかなか良く見ているな。大した観察眼だ」

フオツ、と疾駆は手の魔力によって構成した風を展開させる。肉眼でも確認できるように、魔力を増幅させる。

フオオオオオオオオツ、と風が疾駆の腕の周りで回転するように展開されていた。

(これがあの音の正体……………僕の『円卓の盾』と同じように、回転によって威力を向上させているのか)

「もう言葉は要らないハズだ……………いくぞ」
「ああ」

紅と疾駆。

トリックを暴いた互いの魔法が再び、激突する。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！」
「ッ！！」

ガゴンッ！ と、太一の拳が、神使の顔面に直撃する。その衝撃で、神使の体は大きく宙を舞う。

「がつ、ごあつ……………！！」

ダンッ！ と神使はなんとか地面に着地する事に成功するが、先ほどからダメージを受けっぱなしだった。

「もう息が上がったのか？ 転校生」
「はっ。んなわけねーだろ」

と、神使は言うが、それは強がりだ。丁度一対一で戦いだしてから、太一は『瞬間加速』のスピードを上げた。そこから、あまりのスピードにそれまでなんとか善戦していた神使も、ついに反応しきれずにダメージを重ねてきたのだ。

（学年で第八位の強さ……………今まで戦ってきたヤツよりも順位が低いみたいだが、やりづらい。早すぎて反応しきれねえ分、部が悪い……………！）

神使の持つリングは、攻撃力は高い部類に入る。今までの学年の上位十人の実力を持つ生徒と渡り合えてきたのも、魔神のリングの

攻撃力による所が大きい。

しかし、この太一の場合は違う。今までの相手は学年の上位十人に相応しい攻撃力を持つため、互いの魔法をぶつける事が出来たのだが、太一の『瞬間加速』の場合は早すぎるために捉えられず、攻撃が当たらない。

ようは、相性が悪いのだ。

(くそつ。このままじゃジリ貧だ。こうなったら憑依魔法だまじまじ。．．．)

神使はすぐさま両手のリングを入れ替える。発動する憑依魔法は、『緑』。ゴアツ！ と憑依魔法が発動し、巨大な魔力が巻き起こる。

「何っ!?!」

太一は憑依魔法の魔力にたじろぐ。その間に、神使を憑依魔法の魔力が覆い、背中には魔力の翼が出現。そして右手には緑の槍が生まれる。

同時に、槍をズンツ！ と地面に突き刺し、ゴガガガガガガガガガガガガガガガガツ！ と太一の周りを緑の憑依魔法の魔力で構成した樹木が覆い尽くす。

「ッ!! やるな。これほどの魔力を発揮できるなんてな!」
「一気に覆い尽くししまえば、速さもクソもねえだろッ!!」

ボンツ！ と太一の地面からも樹木が発生する。同時に、太一を覆いつくすために樹木が一斉に太一へと襲い掛かる。

ビリビリ、とアリーナの観客席に張り巡らされた防御壁が憑依魔法の魔力によって揺れる。アリーナの観客席には、観客席の生徒を守るために、巨大な防御壁が張り巡らされている。

それはかなりの強度を誇る防御壁で、破壊する事は難しい。

「ようやく発動してくれたね。憑依魔法」

「そろそろ頃合ね」

「フン。こんな茶番をワザワザ見学してたんだ。暴れてもいいだろう」

カネ、カナロア、ロノ。

三人の魔神がついに、動き出す。

「魔神が動くなら、そろそろかしら。あの神使ちゃんの憑依魔法でアリーナの防御壁も不安定になってるし」

生徒会副会長、白川洋子がじつとアリーナを見つめて、呟く。そして、側に居るある少年と少女に向かって視線を向ける。

「……………本当はアナタに頼りたくないんだけど、頼めるかしら？」

「トーゼン。私はこの為だけに改造されたのだから」

「俺は目標を遂行するまで。命令であれば、誰であろうと駆逐する」

洋子は複雑な視線を二人に向ける。そして意を決したように、二人に指示を与える。

「君は外の王我ちゃんを助けに行ってあげて。アナタは魔神を相手して頂戴」

「了解」

無駄の無い、要領をだけを得たセリフと共に、少年は外に、少女はアリーナへと歩き出す。一人残った洋子はただ、一言だけ呟く。

「……………セカンドシリーズ、か。気に食わないわね」

第七話 掴む手、拒む手

緑の憑依魔法。

そのチカラにより発生した樹木が、太一を覆い尽くす。

(やったか!?)

そして樹木が完全に太一に向かって覆い尽くされた。中からは、なんの反応も無い。沈黙だけが続く。太一が現在どうなっているのか、神使には確かめる術は無かった。

しかし、その沈黙はすぐに破られた。

その理由は単純明快。背後から、ガゴン!! と強い衝撃が走った。太一の拳が、的確に神使の背中を捉えたのだ。

「ぐつがあッ!?!」

ずざざざ、と体勢をなんとかくずさない神使。憑依魔法による身体強化により、先ほどよりもダメージが軽減されたようだ。

「ぐつ!?! くそつ。ダメだったか!」

「俺の『瞬間加速』はあの程度のスピードじゃあ捉えられねえぞ」

「.....だよな」

「ッ!?!」

神使は憑依魔法の魔力により、地中から一気に樹木を構成。太一の両手・両足を一気に捕縛する。無論、神使には先ほどの攻撃では

太一を捉えられない事ぐらい解っていた。

だからこそ、あえて太一が抜けられる隙をあえて作って、樹木を構成した。その隙を突いて接近してくるのなら、反撃は可能だ。

「なッ．．．．．！」

「これで、終わりだあああああああああああああああああああああああ
あああッ！！」

そして神使は、槍を振るう。憑依魔法の魔力により構成した樹木から太一は抜けられない。逆転をかけた一撃。

そして、槍が太一を捉えようとしたその瞬間

バギン！！ と、何かが碎けるような音が、アリーナに響き渡った。その音の正体。それは、三人の魔神により、アリーナの防御壁が砕かれた音であった。

「ッ！！！」

ふわっ、と空中から華麗に着地する三人の魔神。内、一人の女の姿をした？の魔神。 名を、カナロア はじっと神使を見つめる。

同時に、周囲に魔力爆発が起こり、会場のおちこちが爆発する。

「初めまして。そしてさようなら。魔神リングを持つ坊や。私たちの力、返してもらっわよ」

「もう少し空気読めよ．．．．．最悪のタイミングだ畜生」

光は観客席で、美千代と共に神使と紅の試合を見つめていた。最初は、劣勢の神使を応援していたのだが、突如、何者かがアリーナの防御壁を突き破って乱入してきたのだ。

周りには悲鳴と、逃げ回る生徒と、それを誘導する教師達。

「あ、あの、美千代さん？ これって……………」

その後の言葉が続かなかった。美千代が、じつ、と乱入者を見つめていた。

「あの男……………」

美千代が見つめていたのは、？の魔神。名を、『カネ』。

「また……………あの男がッ！！」

そう呟くと、美千代は避難する生徒の流れに逆らい、アリーナへと突き進む。

「あっ！ 美千代さん！」

光の声は、非難する生徒達の声により、飲み込まれていった。美千代には、届かない。

風原は非難する生徒達の流れに乗り、自身も避難を始めていた。

正直状況はさっぱり解らなかつたが、風原はまがいなりにも、魔神の膨大な魔力を感じ取っていた。

風原の魔法は、風力調整等の、魔力コントロールが重要だ。そのため魔力の流れには敏感で、だからこそ、少しだけではあるが、魔神の魔力の大きさを感知取ったのかもしれない。

（くそつ。なんだあのバカデケエ魔力は！？　こんなの、俺達はどうこうできるってレベルじゃねえぞ！？）

そんな事を思いつつ、避難する風原の視界に捉えたのは、一人の少女。その少女はなにやらゆっくりと、アリーナの方へと近寄っている。

（？　何やってんだアイツ。．．．．ああつ！　クソツ！）

風原は非難していく生徒の波をかき分け、その少女の元へと歩み寄る。

（畜生。本当におせっかいだな。俺ってヤツは）

そして、その少女の手を掴む。

「オイ！　何をやってるんだお前はツ！　さつさと避難するぞ！

俺達でどうこう出来るレベルの奴等じゃねえんだよ！」

「嫌だね」

「はあつ！？」

風原が手をとった少女は、スラツとした体形に、爆風に少しサラサラとなびくセミロングの髪。冷たい瞳をしていた。

そしてその瞳でじっ、と風原を見つめる。

「仕方が無い。私はこのためだけに存在している。それをお前なんかに邪魔される筋合いは、無い」

「何わけわかんねえ事言ってるんだ！ あんなバカデケエ魔力は、俺達じゃどうにもなんねえんだよ！」

「だったら、アンタはさっさと逃げな」

それだけ言うと、少女はすっ、と風原の手を拒むようにすり抜け、風原をチラリと見る。そして一気にだんっ！ とジャンプし、アリナへと飛ぶ。中には、巨大な力を持った魔神が三人。

観客席に呆然とした風原が一人、取り残されている。

「なんだってんだ．．．．．クソッ」

あの少女を一人にしておきたくはない。

しかし、自分があの乱入者に敵うとは思わない。

（そつだ。中には神使も、学年順位第三位も、第八位も居る。別に俺が行かなくなつて、アイツは助かるハズだ）

自分が行かなくてもいい。

自分よりも強い人間ヒトがどうにかしてくれる。

自分では、あの少女を助けられない。

(そもそも、アイツとは面識も無い。ワケわかんねえ事行つて、勝手に飛び出して行つたんだ。何の義理もねえじゃねえか。そうだ。そもそも今俺が忠告してやった事自体、可笑しいんだ)

風原とあの少女は別に認識も無い。

名前すら知らない。

勝手に行つて、勝手に飛び出しただけだ。

自分はちゃんと忠告した。

誰も風原を責めないだろう。

けど、それでも。

(でもっ………!! 目の前のヤツがやられるのを、黙って見てるっていうのかッ!?)

あの魔力の大きさは自分は感じ取っている。多分、あの少女も解って居るのだろう。

あの少女がただ単に戦い好き、というだけなのならタダのバカだと風原はその場をすぐに去つただろう。

しかし、風原は聞いてしまったのだ。

(仕方が無い、とアイツは言った! なら、アイツは戦いたいワケじゃねえんだろぅがッ! 戦いたくないヤツが戦ってるってのに、俺は見放すのか!? あいつ等の魔力ちからを知つた上で!?)

風原はぎゅっ、と拳を握る。別に良心が勝ったワケではない。むしろ逆。ただ単に、心を折られたのだ。

あの少女の、別れ際のコトバに。

「ったく。ホント、俺はバカだな．．．．ワザワザ逃げる為に、危険な所に飛び込むなんてよ」

あくまでも、逃げる。それ以外の選択肢は無い。あの少女と、神使達を連れた上で、逃げる。

それが、風原の戦い。

王我は、アリーナの外を警備するように言われていた為、アリーナの屋上に待機していた。警備と言っても、王我は普通にサボっているだけだが。

しかし、中の様子がおかしい事は気づいていた。数度の爆発音。そして中から避難する生徒達。

「なんだか、面白そうな事になってるな」

「全くですね」

「ッ!!」

背後から、突如声が響く。背後を振り返ると、そこには黒いローブを纏った少年が二人居た。

「本っ当に楽しそうだよねえ。お祭りお祭り」

「ルシファー。もう少し静かに願います。他の生徒に気づかれてはどうするんですか」

「ごめんごめんサタン 少し楽しくなっちゃって」

はあっ、とため息をつきながら、サタンはルシファーを見つめる。

「全く。アナタはもう少し緊張感という物を」

バンツ！ と突如、結界が展開される。同時に、王我の魔法、『血龍』がサタンとルシファーに襲い掛かる。

ゴバツツ！！ と翼が振るわれるが、サタンとルシファーはバツクステップで後ろに回避していた。

「いきなりですか。礼儀がなってませんね」

「うるせえ。テメエらの茶番に付き合ってられるか」

アリーナの屋上で、二つ目の戦いが行われようとしていた。

第八話 緑色に輝く翼

ゴウツ、とアリーナの中に砂塵が舞う。爆風により、カナロアの長髪が揺れる。

「さて、と。カネは外に行つて、『才』を持つ者のリングを奪つてきてくれるかしら？」

「あーあ。僕もあの子供には借りがあつただけだな。仕方が無い」
それだけ言い残し、カネはたんっ、とアリーナの外へと飛び立つ。それを確認すると、カナロアとロノは神使をじっ、と見つめる。

そして嬉しそうな笑みを浮かべ、神使に向かつて呟く。

「さて、と。そろそろ返してもらつたよ？」

呟くと同時に、ゴアツ！！ と膨大な魔力と共に巨大な水柱が発生する。

「私たちの、力を」
リング

「誰が返すかッ！！」

ギユアツ！ と複数の水柱が一斉に神使へと襲い掛かる。神使は手の槍を構え、両手を前に突き出し、回転させる。

即席の魔力による防御壁を作り出し、水柱を受け止める。ゴガガガガガガガガガガガガガガガガガガガッ！！ と即席の憑依魔法による防御壁と水柱が激突する。

「ッああああああああああああああああああ！！！」

バンッ！ と槍を振りぬき、同時に水柱が消滅した。そのまま休む事なく、翼を使ってカナロアに向かって加速する。

槍を振るい、カナロアに向かって攻撃をしかける神使。

しかし。

ガツギイイイイイイイイイイイイイイイイイッ！！ と、槍を持ったロノが、神使の槍を防いでいた。

「俺が居る事を忘れていたようだな」

「ッ！？」

そしてロノは槍をガキッ、と弾き、同時にズンッ、と地面に槍を突き立てる。直後、ゴガガガガガガガガッ！！ と樹木が神使の足元から構成される。

樹木の枝が鋭い刃のように神使に突き刺さっていく。神使はなんとか魔力を集約させてこれを防ぐが、所々に魔力の枝がかすめる。

ダメージは免れない。

「ぐっ！？」

「その魔法リングの力は元々俺達の物だ。それすらも忘れたか？」

「……………ッ！！」

元々は、神使の持つ魔神のリングも、現在発動している憑依魔法あいても魔神ロノの物だ。その使い方、応用の仕方も魔神の方が熟知している。

「カナロ．．．．．ッ!?」

ゴツキイイイツ!! と、今度は真横から太一の拳が、ロノの顔を捉えた。ロノはそのままふわっ、と空中に浮き、吹き飛ばす。

なんとか空中で体勢を整え、地面に着地する。

「キサマ．．．．．!」

「誰だか知らねえが、タイムンにワザワザ割り込んできたんだ。覚悟は出来てるよな?」

「いいだろう。そんなに死にたいのなら殺してやるッッッ!」

カナロアはチラリと紅を見る。

「そっちの坊やは、前まではロノの一撃も防げなかったらしいけど、どうやら成長したみたいね?」

「ああ。お前達に襲撃にあつてから、色々と頑張つててね」

「ふうん。なるほど、ね」

そして突如、ギュゴツ! と神使はカナロアに向けて加速し、槍を振るう。しかし振るわれた槍は空しく空を切る。

カナロアが上体をそらし、槍を回避した為だ。

「あら。お話の途中に割り込んでくるなんて、随分礼儀知らずじゃない?」

「突然乱入してきたお前達に言われたかねえよ」

神使は空を切った槍を地面に突き刺し、両手で槍をつかみ、グル

ッ！ と回転。同時に、その遠心力を利用してカナロアを蹴りとばす。

「ッ！？」

不意をつかれたカナロアはガードが間に合わずにその攻撃が直撃し、空中に体が舞う。そして疾駆はその隙を見逃さなかった。『神速』で一気に空中に先回りし、ガゴツ！ と拳をカナロアにぶつける。

カナロアはガードを行えずに、地面に叩きつけられる。しかし、直後にムクリ、と起き上がる。

「やるじゃない」

「やはり、効いてないか」

疾駆はカナロアを見て、ポツリと呟く。

「それじゃあそろそろ、私も本気を出そうかしら」

そう言うと同時に、ゴアッ！！ とカナロアの周囲に水の魔力が巻き起こる。そして水の魔力はピキピキとある一つの物体を作り出すようにしていた。

魔神には、それぞれのスート特有の武器が存在する。

？ならば剣。

？ならば槍。

？ならば盾。

と言った具合に。

そして、？のスイートの武器は、聖杯。

ギョゴツ！！ と、四つの聖杯がカナロアの周囲に構成される。

「さあ。これからが本番よ。ちゃんとしてきてね？」

ポツリ、とカナロアは呟く。同時に、四つの聖杯がひゅんつ、と宙をせわしなく舞う。そしてそれらはやがて神使達の周囲へと展開される。

「なんだ．．．．これは」

神使が呟いた直後。四つの聖杯の底から、鋭い水の魔力が放たれた。

「ッ!？」

神使はとつさに槍を盾にし、紅は『円卓の盾』を展開し、疾駆は風の魔力を操作して即席の魔力の盾を作り出す。

しかし四方向を同時にカバー出来るわけも無く、それぞれダメーシは免れなかった。

「ぐっ!？ これは．．．．ッ!！」

「これが、？の魔神、カナロアの力よ」

カナロアの聖杯の攻撃は止むこと無く、三人を襲う。

「があっ！ この、ままじゃあ……………全滅だッ！！」

「解ってる。でもまずは……………」

「あの聖杯を破壊しないとな」

疾駆は『神速』を発動させ、魔力攻撃の雨を回避する。そして、四つの聖杯の内の一つにたどりついた瞬間、拳を振るう。

しかし、拳は聖杯には当たらず、そのままフツ、と聖杯は空を舞う。

「ッ！？」

「あら、そんな攻撃を受けるようなコントロールはしていないつもりよ？」

刹那。ズガッ！ と聖杯からの魔力攻撃が疾駆を襲う。

「ぐうッ！」

「天野！」

神使は翼で加速し、聖杯を見る。その軌道を完全に捉え、そして槍を振るう。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！」

ガゴッ！ と、聖杯が振るわれた槍により、破壊された。

「次ッ！！」

そして神使は次の聖杯を破壊しようと、翼で加速しようとするが、
「……………ッ!？」

神使を覆っていた憑依魔法の魔力が、突如消滅した。

「なっ……………時間、切れ……………?」

神使の魔力コントロールの鍛錬により、憑依魔法を扱える時間は五分に拡大された。しかし、もう五分を使い切ってしまった。

「時間切れみたいね」
「ッ!！」

ギョオンッ、と三つの聖杯全てが神使を狙う。空中で憑依魔法が解除され、無防備となった神使には回避は不可能だった。

「バイバイ。坊や」

聖杯に魔力が集約されるのが解った。神使は、自分の回避が不可能だという事は解っていた。紅の『円卓の盾』も、最大出力で紅自身への防御に使っているため、神使への防御が間に合わない。

そして、聖杯から魔力が放たれる

事は無かった。

その理由として。

神使の目の前の聖杯を、緑色に輝く翼がなぎ払ったからだ。

「ッ!?!」

「ッ!?!」

神使も、カナロアも、何が起こったのかが解らなかった。神使は翼が振るわれた方向を見る。神使のすぐ近くに、一人の少女が空中に浮いていた。

その少女は、スラツとした体形に、風に少しサラサラとなびくセミロングの髪。そして冷たい瞳をしていた。

「アナタは………?」

カナロアが尋ねる。

そして少女はその問いに、答える。

「セカンド・シリーズ。『リコセカンド』。あんた達魔神を倒すために改造存在うまれただよ」

対して、カナロアは何かを感じ取ったように、ピクツ、と眉が揺れた。

「もしかして、『オ』を持つ者かしら?」

リコセカンドはフッ、と相手を見下したように、笑う。

「違うよ。『オ』を求めた者が作り出した、その成れの果てだ」

第九話 龍

「……………ッ。誰、だ？」

神使は、突如現れた目の前の少女を見つめる。その少女はカナロアの方に目を向けていて、神使の方には一切視線を合わせようとはしない。

そして、神使の目をひきつけているのは、その少女の背中から出現している、翼。先ほどカナロアの攻撃を防いだ翼だ。そして真先に思いついたのは、一年最強の少年にして神使が敗れた、王我龍鬼の『血龍』だ。目の前の少女が展開している翼も、王我のそれと同じような形をしていた。

しかし、違う部分があった。まずはその色。王我の『血龍』は血のように紅く輝いていた。しかし、目の前の少女の翼は緑色に輝いている。

違うのは色だけではなかった。王我の『血龍』はまるで龍のような翼だったのだが、目の前の少女の翼はどこか違う。確かに『血龍』のように龍の翼のような形をしている。しかし、先ほどからメキメキと音を立てており、人の手が加えられたかのような痕がある。まるで、『ムリヤリその形を造ったかのように』

「なるほど……………『才』を求めた者のなれの果て、ね。納得だわ」

フツ、とカナロアが容量を得たかのような表情をしている。

「人間^{ヒト}って、おろかね。こんな事しても、『才^{ヒト}』を得られると思っ
ているのかしら？」

「本当に、『人間^{ヒト}は愚か』って所は確かに同意見だよ」

少女　リコセカンド　は呟くと同時に、背中の翼を振るう。

ゴウツッ！　と風が、空気を切り裂く音が辺りに響き渡った。そ
して、直後、翼から発せられた風の魔力がまるで獣の牙のようにカ
ナロアを襲う。

(早い………！)

神使はその目の前のリコセカンドの攻撃を見て、率直な感想を述
べた。

そう。通常の月無字園の生徒から見ても、その攻撃は早い。しか
しカナロアは魔神だ。通常の間人とは違う。

その攻撃を残った聖杯で作りに出した防御壁で防ぐ。この動作も、
リコセカンドにひけをとらない。しかし、リコセカンドは攻撃の手
を緩めない。いや、まだ終わっていない、という方が正しい。

すぐに第二波を放つ。カナロアは自身が作り出した聖杯の防御壁
で防ぐ。ギャリ、ゴリッ、と、防御壁と攻撃が激突する音が当たり
に響き渡る。

双方、とてつもなく巨大な魔力をぶつけている事が、神使にも解
った。

「さあ………踊りなさい」

カナロアが呟くと同時に、ヒュンツ、と三つの聖杯が宙を舞う。それぞれ優雅に空を舞っている。しかし、ギユアツ！ と、三つの鋭い水の魔力が、リコセカンドに放たれる。

リコセカンドは避ける、という動作を行わなかった。三方向同時に迫り来る水の魔力をまずは確認し、次に迎撃行動に移る。

翼を大きく広げ、ゴウツ！！ と風を展開する。そして風を纏った翼を一気に振るい、迫り来る三方向の水の魔力に対して、魔力で創りあげた風の刃をそれぞれの方向に放つ。

これだけの動作を、カナロアが攻撃行動を行ってからわずが二秒でやり遂げた。まさに洗練された動き、戦う為の、無駄の無い動作。

風の刃と水の魔力が激突し、そして相殺する。パンツ！ と周囲を互いの魔力が拡散する音が包み込んだ。

「やるじゃない」

カナロアはじつ、とリコセカンドを見つめる。対して、リコセカンドは興味なさげにはあつ、とため息をつく。

「この程度だったら拍子抜けだ。私は一体何の為に改造うまれたのやら」
「……あまり、図に乗らない事ね」

カナロアはチラリと太一と戦闘を行っている口ノの方を見る。

「口ノ！ 時間よ！」

その声と共に、ロノは太一との戦闘を中断する。そして、タンツ、と一気にアリーナの端まで飛んだ。

「ようやくかつ！」

「時間？」

リコセカンドはカナロアに問う。

「さつき、この程度なら拍子抜けだ、とアナタは言っただわよね？」

「……拍子抜けなのはこっちの方なのよ？」

「何？」

容量を得ないリコセカンドの様子を見て満足げにするカナロア。

そして、歌うように続ける。

「仮にも、敵の本拠地に攻め込むのよ？ それなりの切り札ジョーカーを持たずに、攻め込むわけないでしょ？」

そう言つと共に、カナロアとロノはアリーナの天井に、魔法弾を放つ。天井に直撃した魔法弾はいとも簡単に天井を砕いた。

砕かれた天井からは、アリーナの中へと、剣が突き刺さるかのようジョーカーに日が差し込む。

「さあ、切り札ジョーカーのお出ましょ」

カナロアは歌うように呟く。その様子は、とても楽しげな物だった。まるで、今から始まるショーに目を輝かせている子供のように。

リコセカンドは天井を見る。同時に、神使も天井を見る。砕かれ

たアリーナの天井から見えるのは、澄み切った青空。

そこに、パリツ、という音と共に、突如巨大な術式を構成された魔法陣が展開された。

「なっ!？」

「なんだアレは……………」

神使の隣に居る疾駆も容量を得ないといった表情だ。

そして、徐々にその魔法陣からパリツ、パリツ、と何かが構成される。最初は小さな音だった何かを構成する音は次第に大きくなっていき、ベキベキ、メキメキ、と嫌な音を立てていく。

しばらくすると、その巨大な何かの正体が明らかになっていった。神使にはそれが何かが、なんとなく、断片的にだが、解った。ただ、自分の目を疑った。自分達は『魔法』という『ありえない力』を使っているわけだが、目の前の何かも、『ありえない物』だったからだ。

空に突如構成された何か。その正体は、巨大な龍だった。

しかし体全体が構成されたワケでは無い。その龍にとっては狭い穴のように感じられているであろうその魔法陣からなんとか顔を、腕を突き出してこちらの世界に出現しようとしている。

「バカな……………まさか、魔神が神のしもべを召喚したと言うのか……………」

紅が空に出現した巨大な龍を見て、呟く。

「私達は魔神よ？ 神の力と、魔王の力を司りし存在。魔王の力の一部も扱えるならば、その逆。神の力の一部も扱えるのよ？ まあ、今回の場合は私達は手を貸したただけなんだけどね。その証拠に」

カナロアがにやりといたずらっ子のような笑みを浮かべる。

「あの龍は、召喚されたわけでは無いわ」

「……ッ！ まさか、あの龍は、お前達が創ったのか!？」

満足げに微笑むカナロア。その笑みは、とてつもなく冷たい笑顔だった。

「そう。あれは召喚したんじゃない。創ったのよ」

「バカな！ 神でも無いのに、神のしもべを創り出したというのか!？」

「言ったでしょ。私達は神と魔王。どちらの力も持っている。だから、その力と、ある別の力を媒体にして、あの龍を作り出したのよ」
「くっ……!」

神のしもべ。

それを、人為的に作り出す。

禁断の行為の成功は、その結果は、とてつもなく大きな意味を持つ。

「まだ不完全だけど、一国をゆうに滅ぼす事の出来る龍が量産出来れば、とても素晴らしい事だとは思わない？」

カナロアは、優しく呟く。まるで、子供に言い聞かせるかのよう
に。

（あの龍は魔神の力だけじゃない。別の力も加わっている……
・『魔法』に続く、新たな力の存在……まさか……
！）

紅はそこで思考を止めた。

理由は簡単だった。

空中の龍の口から、巨大な魔法弾が構成されつつあったからだ。

一国をゆうに滅ぼす事の出来ると言われている龍。その一撃がた
とえただの魔法弾だとしても、その破壊力は計り知れない。

「みんな！ 逃げろ！」

龍の口から、強大な一撃が放たれた。

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

全てが、真っ白な光に包まれた。

第十話 曲炎

王我は、目の前の二人の少年と対峙していた。一人はルシファーと名乗り、一人はサタンと名乗った。目的も何も告げない。ただただ、王我の前に、立ちふさがるのみだった。

続く沈黙を破ったのは、ルシファーだ。

「君が、一年生最強？」

「……それがどうかしたか？」

王我はただそれだけ、短く答えた。相手と遊ぶ気にはならなかった。そもそも、この二人にしろ、先日戦ったイブリースにしろ、通常の魔法使いとは違う感覚がする《……………》のだ。

その違和感の正体を、掴めずにいた。

「うーん。こつちとしては生徒会長の二年生最強と戦ってみたかったんだけど、残念」

「バカかお前は。ザコのお前じゃあ、俺の暇つぶしにもなりやしないよ」

「そのコトバ、そっくりそのままお返しするよ」

ゴウツ！！ と、ルシファーの周囲に炎が巻き起こる。恐らく、ルシファーの魔法なのだろう。

「火属性の魔法か……………」

「その通り」

たんつ、とルシファーは、空中に飛ぶ。そしてそのまま展開した炎を王我に向けて放つ。王我はチラリとサタンの方を見る。どうやらサタンは戦闘には介入する意思は無いようだ。王我はそれを確認すると、背中の翼、『血龍』を展開する。

翼を振るい、炎をなぎ払う。同時に、空へと飛翔する。見たところルシファーは、空中で王我のように飛翔出来るそぶりは見せていない。通常、一人の人間に扱えるリングは一個だけだ。(神使はなぜか例外だが) 例えルシファーが飛行系のリングを持っていても、王我の攻撃はルシファーがリングを入れ替えるよりも早い。

そして、王我は翼を振るう。

「残念」

空中で、さらにルシファーが、飛んだ。

「ッ!？」

いや、正確には、炎を足場にして飛んだのだ。

そして空中に再び飛んだルシファーは驚く王我の顔を真上から見下げる。同時に、再び炎を放つ。王我は放たれた炎を翼でかき消し、地上に着地する。

ルシファーも同時に着地する。

「テメエ。その炎は……」

「曲炎。さっき見せた通り、このリングから発せられた炎は、触れ

る事が出来る。触れる事が出来るから、足場にも出来るんだ。便利でしょ？」

ボウツ、と手の平に炎を撒き散らしながらルシファーが呟く。

「ただ触れる事の出来る炎、か。くだらねえ」

「くだらないかどうかは、受けてから決めなよ」

ボンツ！ と、炎を右手の中に展開するルシファー。炎は形を変え、相手を切り裂くに相応しい形、剣へと変化した。

ただの炎の剣ならば、相手を『焼く』事が出来るだけだろう。しかし、ルシファーの『曲炎』の場合は、触れる事が出来る為、文字通り『焼き切る』事も可能なのだ。

向かってくるルシファーを、王我は翼を振るい、迎撃する、が、ルシファーは足元に炎を展開し、炎の階段を作り出した。その上を素早く上りきり、翼を回避する。

再び空中戦を仕掛けるルシファー。相手は空中で自在に様々な形の炎を作り出す事が出来る。それはつまり、空中戦に適した形の炎も作り出す事が出来るのだ。

王我は翼の力で飛ぶ事は出来る。しかし、あくまでも飛ぶ事が出来るだけだ。空中での選択肢は明らかに向こうの方が多い。

「チツ」

王我は、空中戦は行わず、翼を再び振るう。発生したのは魔力の衝撃波。通常の相手ならば、一撃で葬り去る事の出来る強力な一撃。

しかし、ルシファーはそれを、空中で作り出した炎の足場を使い、軽々とかわす。

炎剣が王我に迫る。

しかし、王我にとってはルシファーの迫り来るスピードはそれほど脅威でもなんでもない。既に見切っている。

よって、ルシファーが地上に着地した瞬間。一瞬だけ無防備となるチャンスの瞬間。それだけを狙う。ルシファーが地上に着地した瞬間に、翼を振るい、倒す。

炎剣が迫り来る。反撃のタイミングをとる。しかし、タイミングをとり損ねた。

ズガッ！ と相手を切り刻むための刃と化した炎剣が王我の頬を掠める。

「……………ッ!？」

王我はタイミングが遅れ、かわされると解つていても、翼を振るった。こうしなければ第二撃が来るからだ。振るった翼は予想通りかわされた。

ルシファーは一旦、王我との距離をとった。

王我の反撃のタイミング。それがズレたのは、ルシファーに突如発生した加速。ギリギリの所で加速され、タイミングがズレた為に、相手の攻撃を受けたのだ。

「なるほどな。ただ触れるだけじゃねえようだ」

「今更気がついた？ 別に魔法の使い方は一つじゃない。そこからどんな応用が出来るかなんだよ。覚えておくといいよ。一年生」
「確かにな」

王我は呟く。

月無学園に入学すると共に、一年生はテストを受ける事となる。
まずは学力テスト。その次に『魔力テスト』だ。

新入生の場合は、『リングの発現』。

それぞれ個人に配られたリングの原石を指にはめて、魔力を集約させ、自身の適正に合ったリングを発現される。

自分に備わっている才能が高ければ高いほど、リングのランクは高い。この時点で学年順位が決定するが、一年の場合は、次の期末テストがあるまでは順位はそのままだ。

確かに魔法は才能が必要だ。しかし、その差を努力で埋める事も出来る。

次のテストでは、誰がどのような魔法の応用を見せ、順位を上げてくるか解らないだろう。

王我自身、なまじ魔法が強力である為に応用どりよくなど必要としなかったが。それでも、目の前の敵にはその応用を行わなければ厳しいのかもしれない。

今まで通りでは、ただ力を振るうだけではダメなのだ。この相手

を倒すには、いままで見ようとしなかった努力おっよろと向き合わなければならぬ。

それが、少女が居る、この学園を守る事につながる。

そつ、と王我は目を瞑る。その瞼の裏に、なぜかその少女が目に見え浮かぶ。

なぜかは解らない。

だけど多分、王我は羨ましいだけなのかもしれない。

だからこそ、浮かぶ。

自分の思った事を素直に言える少女が。

目の前の事に一生懸命に努力する事の出来る少女が。

あの笑顔を向ける事の出来る少女が。

誰にでも笑顔を向ける事の出来る少女が。

自分には出来ない笑顔うらやましいの出来る少女が。

ただ、羨ましいだけなのかもしれない。

生まれたから一人だった自分にとって、少女の居る世界が、笑顔を羨ましく、まぶしいだけなのだ。

しかし、自分もその場所に居たい。

あの少女と共に。

だからこそ、戦う。勝つ。

目的と現在の行動がたとえ矛盾していても、王我は戦う。

守りたいと思ったから。

だからこそ、守る。守ってみせる。

自分の為に。少女の為に。

「　　けど、それがどうした？」

「　　．．．．．何？」

「　　テメエが応用をしようが何しようが。俺のやる事は変わらねえ」

王我は力を振るっているだけではない。応用をしているわけでもない。

ただ、相手を倒す。

単純シンプルな事だ。

「　　フツ。やってみろ」

ルシファーが炎剣を構える。

「　　待て。ルシファー」

ルシファアの静止を求めるサタン。すると突然、アリーナの屋上の床が突如、破壊された。

「!?!」

突如、床が砕けた事に驚く王我。しかし思考する。理由は恐らく下からの攻撃。結界が共鳴し、結界同士が結合し、屋上まで結界が届いているのだろうか。

「.....時間だ」

サタンがポツリと呟くと同時に、空に巨大な魔法陣が出現した。するとそれは不吉な音を立てて、何かを構成してゆく。

やがてそれに、巨大な龍が創られた。

王我は目の前の現象が理解出来なかった。しかし、どうやらサタンとルシファアは理解していたようだ。冷静に、その出現した龍を見つめる。

「どうやら成功だね」

「そのようだ。後はこの学園を、潰すだけだ」

「テメエ達、何を話している？ あの龍はなんだってんだ！」

しかしサタンとルシファアは質問には答えない。

「君とはまた決着をつけたいからね。早くこの場を離れた方がいい.....また会おう。王我龍鬼。楽しかったよ」
「待ちやがれ！」

王我が翼を振るい、衝撃波を発生させる。しかし、突如サタンとルシファアの二人は消えてしまった。消える直前に小瓶のような物を持っていたのを見ると、恐らくその小瓶の力で瞬間移動したのだろうか。

そして、空の龍の口が開き、魔法弾が構成されてゆく。

「……………くっ！」

王我はその場を離れた。そして。

魔法弾が、放たれた。

第十一話 三つのリングを揃えた魔神

美千代は駆け出ししていた。魔神、『カネ』を見かけたからだ。カネはアリーナの外へと行ってしまった。美千代は急いでそれを追いかけていた。

(あの男 あの子達の仇は、必ず !)

カネの雷撃によって倒れた美千代の友人は、ダメージが酷く、現在も月無学園の設備で治療中だ。リングには、生徒の安全を守る為に魔法攻撃を緩和する『装備者保護機能』という物が備え付けられている。

その保護機能が働いてのあのダメージ。もしも保護機能が無かったらと思うとぞっとする。美千代はアリーナの出口に向かって駆け出す。出口から外までの道を注意しながら走り抜ける。

アリーナ全体に結界が展開されているので、魔法は使用可能となっている。いつ、どこから魔法マジックが来るか解らない。

(. 魔法マジック)

ふと、思う。あの時は我を失って考えていなかったが、そもそもなぜ、あの男は魔法が使えるのか。年は美千代達と同じくらいに見える。しかし、この世で魔法が使えるのは(おそらく)月無学園の生徒、教師、および関係者くらいだろう。

しかしあの男はなぜ魔法が使えるのか。

(. 解らない)

美千代はぎゅっ、と唇をかみ締める。それが解れば、あの男を倒すヒントが見つかるかもしれないのに、と思う美千代であったが、なんの事情も知らない美千代には『魔神』という結論には至らないだろう。

考えても、魔神こたえが出ない。考える。ひたすら考える。あの男を倒す可能性が少しでもあるのなら。しかし、その答えが出る前に魔神、カネの姿が見えた。

(居た！)

出口に身を寄せ、そっ、と相手の様子を伺う。同時に、自身の魔法、武器庫魔法ウェボンス・ホールを発動し、サブマシンガンを取り出す。このサブマシンガンは、武器庫魔法ウェボンス・ホールの術式を改良し、強化した為、前回よりも収められている武器の威力が向上している。

様子を伺うと、魔神、カネは誰かと戦っていた。すさまじい魔力で互いを攻撃している。カネと戦っているのは、見知らぬ少年だった。

背中には黄色く輝く翼が展開されている。その少年の魔法なのだろう。そして美千代には、その翼に見覚えがあった。

(似ていますわ あの一年最強いちねいさうきやうの『血龍』の翼と)

しかし王我の『血龍』の翼と違う点といえば、血龍は血のように紅く輝いているのに対して、あの少年の翼の色は黄色い。そしてなにやらその龍の翼は人の手が加えられた、加工されたかのような痕

がある。翼が動いたたびに、メキメキ、ビキビキ、と機械の軋む音が響いている。

ゴバツ！！ と、カネと少年、二人から発せられた雷が激突する。その威力は、生み出した衝撃波で美千代がのけぞる程だ。

「うっ．．．．．！ な、なんて魔力いりよくですの．．．．．！」

トンツ、と両者、地面に足をつける。

「君、一体何者だい？ 君には『オ』が感じられない。しかし、実際に『オ』がある。なぜだ？」

「その質問に答える義務は無い。俺はキサマを始末するだけだ」

ドンツ！！ と少年の背中の翼の魔力が加速する。バチバチと雷が迸り、魔力が上昇していく。それに反応するように、カネの魔力も上昇してゆく。

最早美千代には手出しが出来ないレベルだった。

そして、互いの攻撃が、放たれた。激突する二つの雷。それは互いに互いをくらいあう獣同士の戦いのように思えた。しかしその結末は、魔力の拡散によって集結する。

互いの攻撃が弾かれた事など気にも留めず、少年は翼を羽ばたかせ、一気にカネへと加速する。瞬時にしてカネの元へと回り込んだ少年はそのまま右手で拳をつくり、カネに向かって放つ。しかし、カネはそれを紙一重でかわす。かわされた拳は地面に激突し、まるで大砲でも撃ちはなつたかのような爆発が起こる。

地面から飛び出し出てくる瓦礫などものともせず、カネは飛ぶ。同時に、右手に雷を構成し、少年へと放つ。

少年は体勢を立て直すと、翼を攻撃の方向にあわせ、二枚の翼を重ねる。そしてその翼は、雷を防いだ。

トンツ、と華麗に地面に着地するカネ。そんな二人の攻防を見て、美千代はハツとする。

(な、なんて戦い……私では、まるでついている隙が無い……!)

最早自分に介入出来る魔力^{レベル}では無い。ぎゅっ、と手に構えてあるサブマシンガンを握り締める。せめて、この戦いだけは逃げないで、見ていようと心に誓った。しかし、そんな美千代の気持ちに反して、ピタッ、とカネは動きを止める。

「?」

容量を得ない、といった雰囲気少年。

「ああ。そろそろ時間だ」

「時間?」

「そう。今から面白いショーが始まるからね」

「ショー、だと? 一体なんの事だ?」

「そう答えを急がなくても、もう今から始まるよ。アリーナの屋上でね」

少年はカネの方にも意識を向けながら、アリーナの屋上へと目をやる。美千代もその様子につられてアリーナの屋上へと視線を向け

た。すると、アリーナの屋上が突如、砕けた。

「!?」

少年が驚くと同時に、アリーナ上空に突如として巨大な魔法陣が構成され、ピキピキ、バキバキ、と音を立ててゆく。

美千代は目の前の現象を理解しようとしていたが、理解するよりも早く、その巨大な『龍』が、アリーナ上空に構成された。

「さあ。楽しいショーの始まりだ。危険なショーが、ね」

カネはそれだけ言い残すと、その場を去っていった。

「ッ！ 待て！」

少年はカネの後を追おうとする。しかし、それよりも早く、龍の口より、構成された巨大な魔法弾が放たれた。

ドッゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
と、辺りを揺るがす轟音が響く。

周囲が光に包まれた。

「ぐっ……」

神使は意識を取り戻した。体の所々が痛む。隣には太一が居た。どうやら魔法弾が放たれる瞬間、『瞬間加速』で動けない神使を運

に響き渡った。

ゴウツ！！ とロノから力があふれ出てくる。あまりのパワーに、神使の体が一瞬宙に浮き、地面をバウンドする。

「ガツ……………あツ……………！」

腹部がズキズキと痛む。今の衝撃でどうやらあばら骨が数本折れたようだ。

「さて、他のリングも頂こうか」

ざりっ、と三つのリングをそろえたロノが近寄ってくる。そしてその手を、無防備に倒れている神使へと向ける。

ガツ！！ と、その手を紅の円卓の盾が、防いだ。

「……………本当に、しぶといヤツ等だ」

ロノが見据える先には、地面に倒れている紅が居た。

「まずはキサマから葬ってやるっ」

それだけ呟くと、ドンツ！！ とロノの周囲から、樹木が発生する。そしてその枝の一本一本が怪物のように呻く。

魔力によって刃物と化した枝が、紅に迫る。紅はとっさに円卓の盾を展開し、ガードを試みるが、三つのリングをそろえたロノの前には、その防御も無意味だった。

いとも簡単に円卓の盾が砕け、その枝が紅に迫る。

「紅………!!」

神使は右手に赤魔法、左手に黄魔法のリングをはめて応戦しようとするが、ロノの攻撃は早い。神使の援護が間に合わない。

魔神、ロノの刃が紅へと襲い掛かる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3784v/>

魔神のリングと憑依魔法

2011年9月25日02時12分発行